
ゼロの使い魔 - 転移する盾 -

絶華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 - 転移する盾 -

【Nコード】

N95580

【作者名】

絶華

【あらすじ】

テンプレっぽい死に方をした主人公がたどり着いたのは『ゼロの使い魔』の世界だった！？これは、そんな主人公が織り成すグダグダな物語。

プロローグ（前書き）

初めての作品なので温かい目で見てください幸いです。

プロローグ

「……どうしてこうなったんだ？」

俺こと皋月翔太さつきしょうたは自らの行動を思い出すとともに、目の前で土下座している人を見て呟いていた。

「で、あんた誰だよ」

するとその人は顔を上げて立ち上がると、

「一応あなた達が言うところの神、といったところです」

「……………へ？」

「だから、僕は神です。神様です。GODです」

「いや何回も言わなくていいから」

神様とか言ってるけど本当なのかねえ？

………って、アレ？

「まさかその自称神がいるって事は………」

「自称じゃありませんよ。ですが理解が早くてこちらも助かります」

「あなたは死にました。」

「………マジで？」

「マジです。」

いつの間にか死んでたとか笑えねえ

「ちなみに聞くけど……」

「…はい」

「なんで俺死んだ訳？」

すると神様は再度土下座の体制になり

「すいまつせんでしたあああああああああ！！！！！！！！！！」

と全力で謝ってきた。

「！？と、とりあえず落ち着け。とりあえずなんで謝っているのか説明してくれよ」

「はい……………実は……………」

神様説明中……………

「なるほど、要約するとあんたが爪を切っていたところたまたまそ

の爪が落ちて偶然そこらへんを歩いていた俺に刺さってしまった、と」

「やつちゃったものはしかたないですよねぇ」

「軽っ!？」

「まああなたが死んだのは僕の落ち度ですし……あ、そうだと神様、なにか思い出したようだ。」

「罪滅ぼしといってはなんですが、あなた別の世界へ行ってみる気はないですか？」

「別の世界？」

「そう、別の世界といっても生前あなたが見ていたアニメやゲーム、ラノベの世界になりますが」

マジでか、ということはガンダムに乗ったり、リリカルでマジカルな魔法とか使えちゃうわけ？だったら答えはひとつしかないでしょ。

「行きます」

「じゃあ、プレゼントとしてこの中から選んでもらいます」

そこに出てきたのは4つの箱。これってもしかして……

「さあ、このかみさまボックスから好きな文字の箱を選んでください」

やっぱりは○まるボックスのパクリかよ。

「うーん、じゃあ『み』で」

そして箱を開けると中には、

「えーっと、『大当たり！！テイルズ作品の術・技使用可能と武器アイテム等を自由に作り出せる程度の能力＋α』なんなのこれ？」

「大当たりですか、なかなかやりますね。文字通りあなたはテイルズ作品の術・技などを使うことが出来、武器アイテム等を自由、といつても一度に出せる数は限度がありますが、作ることができるの能力をプレゼントします」

「ふーん、でこの＋αって奴は？」

「これは自分で好きな能力を作る事が出来ます、あなたは大当たりでしたので作れる能力は5個ほどですが」

「て、ことは王の財宝とか天地乖離^{ゲート・オブ・バビロン エヌマエリシュ}す開闢の星とか出来ちゃうわけなの？」

「そこまですごい能力はいきなり何個でも使えるとチート過ぎるので時機を見て一つつつ開放するようにはなりますが、一応使えます」

「で、これって後で考えてもいいんでしょう？」

「もちろんです。」

「じゃあ後でゆつくりと考えようかな。……ん？そっぴえば好きな能力使えるなら別にテイルズの能力貰わなくてもいいよ

」

「ちょっと黙らないでくださいよ」

「ぐすん」

「涙目にならないでくださいよ、わかりましたちゃんとテイルズの能力使いますよ」

「最初からそっぴえよ」

「なんで上から目線！？」

などといった雑談をしてなんか数時間たってました。

「そういえば俺はどの世界に行くんですか？」

俺がそう言つと神様はなにやら怪しいスイッチを持ち、

「スイッチオン」

パカッ

「え？」

神様がスイッチを押した瞬間俺の足元が開き、それに吸い込まれるかのように俺は落ちていった。

「逝つてらっしゃい。また後で会いましょう」

神様……心なしか文字が違つような気がするんだけど……つかまた後でって何！？

そして俺の意識は薄れて行って……

「あんたたち誰？」

目を覚ますと聞き覚えのある釘宮ボイス、そして桃色がかったブロンドの長髪。

「ゼロ魔の世界か……」

俺の冒険は今始まった……らしい。

ブローグ（後書き）

駄文ですがよろしく願いします。

1 1 / 1 7 大幅改定

1 1 / 2 1 時間調整

6 / 1 1 神様の口調変更

1話 召喚（前書き）

前回までのあらすじ

なんの因果か神様に殺された俺こと皐月翔太。まあ神の罪滅ぼしで
割りとアレな能力を貰い異世界へ
目を覚ますとそこには……

1話 召喚

「誰……と言われてもな」

目覚めて早々「あんたたち誰」だったからな…ってたち？と俺はふと回りを見てみるとそこにはゼロ魔の本来の主人公 平賀才人もいた。

（おつ才人もいたのか、俺一人だったらどうしようかと思ったぜ。それにしても何で夕方なんだ？ 確か原作では昼間だったはずだけど……）

などと思っていると突然、

「ルイズ、『サモンサーヴァント』で平民を呼び出してどうするんだよ」

と誰かがそういうと、そこにいたルイズ以外の全員が笑った。

「ちょっと間違っただけよ！」

ルイズが怒鳴った。しかしまあよい声だ。

「間違いつて、ゼロのルイズはいつもそうじゃん」

「さすがはゼロのルイズだ！」

誰かがそう言うと、人垣がどつと爆笑する。

「ミスタ・コルベール！」

ルイズが怒鳴ると、人垣が割れて中年の男性が現れた。

「なんだね。ミス・ヴァリエール」

「もう一回召喚させてください！」

ルイズがそういうとコルベール先生は首を振った。

「それはダメだ。ミス・ヴァリエール」

「どうしてですか！」

「決まりだよ。二年生に進級する際、君達は『使い魔』を召喚する。それによって現れた使い魔の属性によって今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進むんだ。一度呼び出した『使い魔』は変更できない、なぜなら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。だから好む好まないにかかわらず、彼らを使い魔にするしかない」

「でも！平民を使い魔にするなんて聞いたことがありません！」

ルイズがそういうと、再び周りがどつと笑う。ルイズは、その人垣を睨みつける。それでも笑いは止まらない。

「これは伝統なんだ、例外は認められない。彼らは……」

とコルベール先生は俺らを指差した。

「ただの平民かもしれないが、呼び出された以上、君の『使い魔』

にならなければならない。古今東西、人を使い魔にした例はないが、彼らには君の使い魔になってもらわなくてはな」

「そんな……」

ルイズはがつくりと肩を落とした。

「さて、儀式を続けなさい。君は召喚にどれだけ時間をかけたと思っ
っているんだね？早く契約したまえ」

そうだそうだと野次が飛ぶ。

ルイズは俺たちの顔を、困ったように見つめた。

「あんたたち感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、
普通は一生ないんだから」

そしてルイズは、諦めたように目をつむり、手に持った小さな杖を
まず才人の前で振った。

（まず才人からなんだ）

とか俺が思っていると、

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリ
エール。五つの力を司るペンタゴン、この者たちに祝福を与え、我
の使い魔となせ」

呪文の詠唱が聞こえ、才人とルイズは唇を重ねた。

（いやあこのシーンを実際に見れるなんて思ってもいなかったよ。）
などと俺が思っていると

「次はあんだね」

「へ？」

才人の左手にルーンが刻まれるのを見届けてからルイズは俺に近寄り、ルイズの唇が俺の唇に重ねられる。

その瞬間俺の左手に激痛が走った。

「熱っ！！」

しかし痛みは一瞬で消えていった。

「なんかものすごい痛みの割にはあまりたいしたことないな」

どうせ俺もガンダールヴなんだろ？と左手を見た俺は、一応ガンダールヴなので安心したのだが、

（アレ？なんか色違うね？）

そう、俺に刻まれたルーンは間違いなくガンダールヴだったのだが、書かれている文字の色が通常の色ではなく、どす黒い血のような色だったのだ。

（まあ能力は変わらないんだろ？）

と、とりあえずこのルーンのことは、ひとまずおいておくことにして……などと思っていたらコルベール先生が俺に刻まれたルーンをスケッチしていた、まあガンダールヴなんてそうそう出てないんだろうし珍しかったんじゃないかな？

ほどなくしてコルベール先生のスケッチも終わり、

「さて、これで全員使い魔召喚の儀式は終わったね。では各自、部屋に戻りなさい」

そうコルベールが言うのと周りに居た生徒達はそれぞれ『フライ』や『レビテーション』を唱え空を飛んで自分の部屋へと戻ってゆく。

わかつてはいたが人間が空を飛んでいますよ？やっぱりすげえ魔法って。

「ルイズ、お前は歩いて来いよ！」

「『フライ』はおろか、『レビテーション』さえまともにできないからな！」

飛んでいく生徒たちが口々にそう言って笑いながら飛び去っていく。

残されたのは、ルイズと俺、才人の3人だけになった。

ルイズはため息をつくとき、俺達の方を向いて、

「そういえば、あんたたち名前は？」

と言った。そういえば自己紹介してなかったな。

「俺は皐月翔太だ」

「サツキシヨウタ？変な名前ね、であんたは？」

そついつてルイズはサイトに聞く。

「俺は平賀才人だ。ところで……ここはどこなんだ？そしてやたら偉そうなお前はなんなんだ？」

当然の疑問だと思う。ていうか才人、なんか物分り良すぎないか？

「トリステイン！ 高名なトリステイン魔法学院よ！ それに、偉そうじゃなくて偉いの！」

偉いの！の部分で、ビシッと才人を指差すルイズ。

「トリステイン？ 何処だよ」

「あんた、何処の田舎から来たのよ……トリステインを知らないなんて」

「田舎あ？ 田舎はここだろ？東京はこんなにド田舎じゃないぞ」

「トーキョー？ 何処の国よ？」

「日本」

「なにそれ。ニホン？そんな国聞いたこともないわよ」

「はあ？日本を知らないとか「まあ聞いたことがないのもわかるよ」うな気がするよ」「へ？」

と、この無駄なやり取りを終わらせる気になったので俺は口を挟んだ。

「なんでわかるんだ？」

「空見てみる」

そっいつて俺が空にあったあるものを指差す。

「な…なんだよあれ」

そこには月が二つあった

「とりあえず目的地にいたら説明するよ」

と俺達はルイズの後について学園へ向かうのだった。

1話 召喚（後書き）

主人公の詳細ですが、原作一巻にあたる物語が終わったあたりで発表したいと思います。

あと、投稿直後に重大な欠陥があつて直すのはよくあることなので気にしないでいただけると助かります。

2話 説明と確認（前書き）

さて前回のあらすじ

なりゆきでルイズと契約させられた俺こと皐月翔太。

様々な問題点が初っぱなから出ていたのだが……？

2話 説明と確認

あの後まあ色々あつて俺たちはルイズの部屋に来ました。

「それほんと？」

ルイズが疑わしげに俺たちを見つめながら言った。

「ああ。信じてもえないだろうが俺と才人はこことは違う世界から来たらしい」

ルイズの部屋にきた俺たちはとりあえずルイズに俺たちがこことは違う世界から来たことを話していた。

「信じられないわ」

「信じてくれないと困るのだが」

「別の世界って、どういうこと？」

「こことは違って魔法使いがないし月は一つだけだ」

「そんな世界がどこにあるの？」

「俺が元いたところはそうなんだよ！」

と才人が怒鳴った。

「怒鳴らないでよ。平民の分際で」

「誰が平民だよ！」

「だって、あんたたちメイジじゃないんですよ。だったら平民じゃない」

「なんだよそのメイジとか平民ってのは」

「もう、ほんとにあんたたち、この世界の人間なの？」

「だから違うつて言っただけど…」

などと小一時間ルイズを（主に才人が）説得していると、

「わかったわよ！信じるわ！」

「やっとわかってくれたよ…」

腕を組んで、ルイズは怒鳴る。

「だって、そう言わないと、あんたたちしつこいんだもん！」

「まあ、なんにせよわかってくれればそれでいい。さて才人、これからどうする？」

「これからって…一応聞いてみるけど元の場所に戻る方法ってあるのか？」

そう才人がルイズに質問すると、

「ないわ。使い魔の契約は一生だもの」

「まあそうだろうとは思ってたがな。」

と、俺は一応言っておく。

「探していればいつか見つかるだろ。だからそれまでの間、俺はしばらくあんたの使い魔をやらせてもらおうか。」

「本当に翔太はそれでいいのか？」

「よく考えてみる才人、俺たちはこの世界のことをなにも知らないんだぜ？いろいろと知らないってのはまずいと思うんだが……」

と言うと才人は少し考えてからルイズに、

「……わかった。翔太の言う通りしばらくはお前の使い魔とやらになつてやるよ」

「なによそれ」

「なんだよ。文句あんのかよ」

「口の利き方がなつてないわ。『なんなりとお申しつけください、ご主人様』でしょ？」

ルイズは才人に得意げに指を立てて言った。物凄く腹がたつんだがここは抑えておこう。

「で？使い魔って具体的になにすんの？」

と、俺はルイズに聞いてみる。

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ。でも、あんたたちじゃ無理みたいね。わたし、何にも見えないもん！」

「そりゃ残念なことだ」

「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね」

「媚薬？なんかエロイな」

「秘薬よ！ひ・や・く！」

「冗談だ。秘薬って言うと飲んだだけで体力全回復！みたいなやつか？」

「まあそういうのも間違いではないわ。でもあんたたちそういうの採ってこれないでしょ？」

「まあね。」

「最初から期待はしてなかったわ。」

「じゃあ言っなよ」

才人がそう言うと、ルイズは苛立たちそうに言葉を続けた。

「それと、これが一番なんだけど、使い魔は主人を守る存在なのよ。持った能力で主人に降りかかる危険を払うのが一番の役目！でもあんたたちじゃ無理そうね、カラスにも負けそうじゃない。」

「なめないでほしいな。いくらなんでも数十人だったら負けるが、数人程度なら楽勝だ」

神様からもらった能力もあるしな。

「本当なの？そうは見えないんだけど」

「まあ今は武器がないから無理だけどな」

「じゃあ駄目じゃないの。」

とルイズは呟く。一応武器は出せるんだが早い段階で出すとデルフ購入イベントがなくなる可能性があるからな。

「まあいいわ……とりあえずあんたたちにできそうなことをやらせてあげる。」

「なんだよ」

才人がそう言うと、ルイズは

「掃除。洗濯。その他雑用」

「ふざけんな。そのうち絶対帰る方法を見つけてやるからな！」

「はいはい。そうしてくれるとありがたいわ。あんたたちが別の世界とやらに消えてくれれば、わたしだって次の使い魔を召喚できるもの」

「こいつ…」

と、使い魔うんぬんの話は、ここで一旦終結した。

まあ、寝る時にまたひと悶着あったりしたのだが……

「さてと……」

ルイズと才人が寝たのを確認した俺は一人外に出ていた。

「原作といろいろと違っていたところがあったな……」

まず召喚された時刻。

原作では昼だったはずなのだが、この世界に召喚されたときは夕方だった。

「これの原因ってやっぱり……」

と、俺は神との無駄話を思い出していた。（プロローグ参照）

あれのせいで召喚の時間がずれたんだろうか。

「それと、このルーンだな」

俺は左手のルーンを見る。

「いったい何なんだろう？普通のガンダールヴじゃないと思うけど」

その瞬間。

ガンダールヴのルーンが一瞬違う文字に変わった……ような気がした。

「文字が変わった！？見間違いかな？」

その後何度見てもガンダールヴの文字に変わったところはない。

「まあいいや……さて、神からもらった能力の確認でもしようかな」

と、神からもらった能力を試そうとする。

「まずは武器からしようかな。よし……ってあれ？どうやって出せばいいんだ？」

そこから一時間弱の間、ああだこうだと悩み続けた末、頭でイメージしたら出てきたのでまあいいかなーと思いました。

「なぜ作文口調？」

地の分につっこまないでください。

「まあいいや、じゃあ次は技だな」

と俺は剣を構えて、テイルズにおいて最も有名なあの技を繰り出す。

「魔神剣！！！」

剣を振り払うと、剣圧が近くにあった岩に向かって地面をかけていき、その一撃を受けた岩は粉々になった。

「すげえ、本当に出来たよ。ほかの技も出来るのかな？」

その後いくつかの技を確かめてから俺はルイズの部屋に戻ったのであった。

2話 説明と確認（後書き）

矛盾点疑問点等ありましたらよろしくお願いします。

3話 朝と火蜥蜴（前書き）

では、あらすじです。

ゼロ魔の世界に飛ばされた俺こと皐月翔太。

一瞬ルーンが変わったような気がしたんだけど…？

3話 朝と火蜥蜴

「才人起きろ」

朝起きた俺はとりあえず才人を起こそうとしていた。勿論ルイズを起こさないようにさ。

「ん…あと十分…」

「蹴るよ？主に股関の辺りを。全力で」

そう言うとき才人は跳ね起きた。さっさと起きれば良いのだよ。

「なんだよこんな早くに」

才人が眠そうな声で言った。

「早くねえよ。それより才人。今日一日俺はこの世界について調べてみるから、ルイズのこと任せたぞ。」

「ああ」

「さてと……ルイズを起こそうかね。」

そう言うとき俺は寝ているルイズの毛布を引き剥がした。

「な、なによ！なにごと！」

「朝だぞ。ご主人様（仮）」

「（仮）ってなんなの……って誰よあんたたち！」

ルイズが寝ぼけた声で怒鳴った。こいつ記憶力が皆無なのか？

「お前が昨日呼んだ使い魔だよ」

「ああ、そうだったわ。昨日召喚したんだっけ」

ルイズは起き上がると、あくびをして才人に命令した。

「服」

才人は椅子にかかった制服を、放り投げた。制服を受け取ったルイズはだるそうにネグリジエを脱ぎ始めた。しかしアレだな、もはや貧乳っていうか……哀れ乳？

などと思っていたらルイズの着替えが終わったようだったので、俺はルイズ達と一緒に部屋を出ることにした。

部屋を出ると、ちょうど三つある内の一つの扉が開いた。そこから、赤い髪の女の子が現れた。

俺と同じぐらいの身長に、褐色の肌、そして真っ先に目がいくのは突き出た胸であろう。一番上と二番目のブラウスのボタンが外れている為、余計に強調される。

ほとんど、全てと喋っているルイズと対照的であった女の子は、

こちらの存在に気付くとニヤリと不適な笑みを浮かべた。

「おはよう、ルイズ」

ルイズは嫌そうな表情を浮かべながらも挨拶を返す。

「おはよう。キュルケ」

「あなたの使い魔つてもしかしてそれ？」

と、キュルケは俺たちの事を指差した。

「ええ」

「へえ、ホントに人間だなんて、凄いじゃない！」

アッハッハと笑い出すキュルケ。ルイズは腕を組んだまま黙っている。

「『サモン・サーヴァント』で平民を喚んじやうなんて。あなたらしいわね『ゼロ』のルイズ」

ルイズのこめかみがピクツと動くのが俺の視界に入った。

「うるさいわね」

「誰かさんと違って一発で私は成功したけどね」

「へえ」

「使い魔はやっぱりこういうのがいいわよねえ、フレイム！」

キュルケは、自慢するかのように自分の使い魔を呼んだ。キュルケの部屋からゆつたりと、真っ赤な巨大

なトカゲが廊下へと覗き込む。むんとした熱気が俺達を襲う。

「うおっ！すげー」

今まで見たことがなかった生物に、俺は喜んだ。

「あら？　もしかしてあなたこの火トカゲを見るのは初めて？」

「まあね」

「あんたのサラマンダーはわかったから、そろそろ行かしてくれるかしら？　キュルケ」

「あら、じゃお先に失礼……とその前にあなた達のお名前は？」

「ん……名前？」

俺の問いに、キュルケはにつこりと笑いながら頷く。

「臯月翔太だ」

「平賀才人」

「サツキシヨウタとヒラガサイト？　不思議な名前」

「まあ発音が違うがいいか」

「そ、それじゃあお先に」

そっいつて勝者のようにポーズを取りキュルケは去っていった。それに続いてサラマンダーが可愛らしく動く。

キュルケが視界からいなくなると、ルイズは拳を強く握り締めた。

「あーもうむかつく！ 自分がサラマンダーを召喚したからってわざわざ自慢しにきて！ くやしー！」

「召喚なんて別にいんじゃないね？」

俺の不用意な発言に、ルイズは怒りの矛先を向ける。

「よくないわよ、バカ！ メイジの実力をはかるには使い魔を見ろって言われてるのよ！？ なんでわたしがあんなたちみたいなのなのよ！」

「そう怒鳴っても仕方ないだろ。ていうか見方の問題でしょ？」

「え？」

「そんなサラマンダーを従えてる人間が一番強いんだろ？ その一番強い人間を召喚したお前は誇れるんじゃないの？」

「はあ……従えてるのはメイジ、そしてあんたは平民。例えるならオオカミと犬ほど違いがあるのよ」

「なんつー理論だよ……」

「わかったらさっさと行く」

「じゃ才人後は頼んだ」

「あ、ああかった」

「ちょっと、どこ行くのよ」

「才人にでも聞いておいてくれ」

そういつて俺は才人達から離れた。

3話 朝と火蜥蜴（後書き）

テストとかモンハンとかモンハンとかモンハンとかで更新が遅れましたが、完全復活です。

4話 メイドと魔法（前書き）

恒例のあらすじタイム

ゼロ魔の世界にきて二日目の俺こと皐月翔太。

なんかキュルケとかでてきましたよ？

4話 メイドと魔法

さて、才人達と別れた俺は一人厨房に向かっていた。

「あのままついていったら貧相な朝食だったから……………頑張れよ才人」

才人の安全を祈りつつ歩いていると、ほどなくして厨房にたどり着いた。大きな鍋や、オーブンがいくつも並んでいて、コックやメイドさんが忙しげに料理を作っている。

「すいませーん」

と、入り口の辺りで声を上げると、

「どうなさいました？」

近くにいたメイドさんが話しかけてきた。カチューシャで纏めた黒髪とそばかすが可愛い……っておい、まさかこの娘って……。

そう思っているとメイドさんは俺の左手のルーンに気付いたらしく、

「あなた、もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になったっていう……………」

「知ってるんだ」

「ええ。なんでも、召喚の魔法で平民を呼んでしまったって。噂になっっていますわ」

メイドさんはにつこりと笑った。なんて言うか……その笑顔はとても可愛かった。

「そうなんだ…俺は皋月翔太。よろしく」

「変わったお名前ですね……。私はシエスタって言います」

やっぱりシエスタでしたよ。でもそばかすがあるって事はこの世界は原作基準なのだろうか。モット伯だっけ？あのイベントはあっても無くてもいいようなイベントだからいいけど……。まあそんなことより、

「貴族の皆様と同じ場所で食事するわけにはいけないので、なにか頂ければと思ひまして…」

勿論半分以上「冗談」だけだな。

「そうだったんですか。じゃあこちらにいらしてください」

そして俺は賄いとしてシチューを貰い、食後のお茶を飲んでいた。

「そう言えばシヨウタさんはどこから来たんですか？」

「ここから遠い所。かな」

「遠い所というと……もしかして東方ですか？」

「東方？まあそうかな」

この場合は話を合わせた方がいいかな。

「どんなところか教えてくれませんか？」

「いいけど……」

と言うと厨房内に叫び声が起こった。

「やばい！！火が止まらないぞ！！」

声の上がつた方を見ると、油かなんかに引火したのだろうか。
火の手が上がっていた。

「たたた、大変ですよどうしましょう！？」

「落ち着けシエスタ」

厨房の皆さんが必死に火を消そうとしているが、火は消えるそぶりを見せない。

「仕方ないな……飯代替わりにこの火災、消してやるよ」

「どうやってですか！？普通にやっても消えないんですよ！？」

「まあ見てろって」

そう言う俺は精神を集中させ、

「水に飲まれろっ！！『スプレッド』小』！！」

その詠唱により圧縮された水流が火災の真上から降り注ぎ、あれほど手こずっていた火災がほんの数秒で消えた。

「さて…こんなもんかな」

小でこの威力……。あまり魔法は使わないようにしよう。

などと思いつつシエスタの方を振り返ると、なぜか厨房の皆さんが驚いていた。

「どうしたんです？」

俺がそう問いかけるとシエスタが答えた。

「シヨウタさん……あなた、メイジだったんですか？」

………忘れてた。さて、どうやって言い訳しようか。

「えーっと……」

俺が答えに詰まっていると、奥の方からコックさんが出てきた。

「メイジの方がなんでこんな所にいるんだ？」

「あなたは？」

「俺はこの厨房のチーフをしているマルトーと言っ。」

マルトーさんでしたよ。……っそうだ、この手でいっ。

俺はマルトーさんの顔を見てふと思い付いた事を言うことにした。

「マルトーさん。俺は皆さんと同じ平民ですよ」

「平民ならなんで魔法が使える？」

「この力は俺の故郷のマジックアイテムの効果なんですよ」

「故郷？」

「ああ、まだ話していなかったっけ。一応俺は皆さんがロバ・アル・カリイエと呼ぶ辺りから来ました」

と、ポケットの中で作り出した腕輪を出し、テーブルの上に置く。

「このマジックアイテムをつけると、平民でも魔法が使えるんです」

「本当なのか？」

厨房の皆さんは訝しげに腕輪を見た。

「まあ言っただけじゃ信じてもらえないのもわかります。そうだな……マルトーさん、最近どこか痛い所はありませんか？」

「痛いところ？そうだなあ、最近腰がちよつとなあ……」

「腰ね……。シエスタ、ちよつとこの腕輪つけてくれないか？」

そう言う俺はシエスタに腕輪を手渡す。

「わ、私がやるんですか？」

「だってその方が証明になるでしょ？平民が魔法を使っつていう事の、さ」

シエスタは少し考えてから腕輪を身につけた。

「よし、それじゃあマルトーさんの腰の辺りに意識を集中させて『ファーストエイド』と唱えてくれないかな」

「わかりました……『ファーストエイド』！」

シエスタがそう唱えると、暖かな癒しの光がマルトーさんの腰を包むように輝いた。

「おおっ！腰の痛みがまったくくないぞ！」

マルトーさんがそう言つと周りから驚きの声上がる。

「これで信じてもらえますよね？」

「あ、ああ」

そして俺はシエスタの方を向き、

「どうだった？魔法を使った感じは」

するとシエスタは

「凄いです！私みたいな平民が魔法を使えるなんて！」

「まあそうだろうね……そうだ、その腕輪プレゼントするよ」

「でもこれがないとシヨウタさんは魔法を使えないんじゃないんですか？」

「それは心配ないよ。そのマジックアイテムは魔法が使えるというよりは魔法を覚えるものだから」

「覚える……ですか？」

「うん、その腕輪の横に青色の細長い奴があるでしょ」

と、シエスタがはめている腕輪を指さす。

「これですか？」

「そうそれ。その端の方が少し赤くなってるでしょ？それが全部赤くなったら腕輪が無くても魔法を使えるわけ」

「そんな貴重な物を貰っていいんでしょうか……」

「別にそんな魔法ならもといた場所に普通に売っている物だから大丈夫だよ」

「そうなんですか……じゃあ貰いますね」

「ああそうだ、完全に赤くなったら俺に言ってくれ。新しい魔法をプレゼントするかもしれないから」

「わかりました」

「さて…マルトーさん」

「ん？なんだ？」

「朝食のお返しに何か手伝いたいのですが」

「そうだなあ……じゃあ手伝って貰おうか」

「何でも言ってくださいよ」

さて、その後しばらく厨房で手伝いなどをして時間を潰していたのだが…

「！？」

突然大きな爆発音が校舎の方から起こった

「あーまたか」

「マルトーさん、またって？」

「ん？ああ、お前の主人のミス・ヴァリエールの魔法が失敗したのさ」

やっぱりか、ってことはもうすぐ決闘かな？

「ちょっと行つてきます。」

「昼にまた来るんだろ？」

「はい、仕事お手伝いしますので昼食二人分お願いします。」

「二人…？ああそうか、もう一人いたんだっけな」

「ええ、それじゃそういうことで」

急いで爆発のした教室に行ってみると、そこでルイズと才人が教室の片付けをしていた。

「ちょっとあんだどこ行ってたの！？」

「は？才人お前説明してくれたんじゃないの？」

「あーなんつーか……忘れてた」

「忘れてたってお前なあ……」

「で、あんたはどこにいったわけ？」

「まあ色々回って情報集め…かな。で、この惨状は何なの？」

「ルイズの魔法が爆発したんだ」

「ふーん」

「あんたもわたしのこと馬鹿にしてるんでしょ！『ゼロ』のルイズ
つて！」

「いや別に。って言うか俺達を召喚している時点で『ゼロ』じゃない
と思うんだが」

「……確かにそうね」

ボソツ「まあ胸は限りなくゼロだな」

才人は聞こえない程度で呟いたつもりだったが、どうやらルイズに
聞こえていたらしく、

「だ・れ・の胸がゼロですって？」

「…ナ、ナンデモナイデスヨゴシユジンサマ」

「……あんた達、今日一日ご飯抜きね」

「達って俺も!？」

「連帯責任よ」

「まじでか……」

と、俺と才人はがつくり肩を落とした。まあ俺は厨房のほうで昼食

をもらっ予定なのであくまでもふりなのだが

「…まあとりあえず教室片付けようぜ」

「そっだな」

4話 メイドと魔法（後書き）

私の友人から誰が喋っているのかわからない。ということがあったので、「」の前に名前をつけようかどうか迷っています。

5話 薔薇と決闘

二時間ほどたって教室の片付けも終わり、ルイズは若干怒った様子で教室から出て行った。

「…今日一日飯無しだったさ」

「そうだな」

「明らかに俺のせいだよな」

「お前がゼロ乳なんて言うから」

「いやそこまでは言っていないよ!？」

才人はそう言うのと、ため息をついた。そろそろ言っておこうかな

「あー才人？落ち込んでる所悪いんだけど、昼飯のあてはあるんだ」

「どういうことだ？」

俺は才人に厨房で昼飯を食べさせてもらえることを話した。それを聞いた才人は、とても喜んでいて。そういえば才人の朝食は原作通りならパン二切れとスープだったっけ？喜ぶのもわかるような気がする。

「さて、厨房にいきますかね」

「そついえばそんな時間だな。早くいこうぜ」

「落ち着け才人。昼飯は逃げないから」

「だってようやくこつちに来てまともな食事にありつけるんだぜ？
テンション上がるのは当たり前だろ」

「まあそれもそうか。一応言っておくが食べ終わったら厨房の仕事
手伝うからな」

「わかってるって。飯が食えれば俺は何でもするよ」

「何度も何度も躓いてゝ立ち上がるたびゝきつと強くなってるゝ」

さて、昼飯をご馳走になった俺達は厨房のお手伝いをしていた。才
人は原作通り給仕を、そして俺は皿洗いを現在進行形で
やっているのだった

「さて、これで最後だな」

俺は最後の皿を置くと大きく伸びをした

さて、そんな時にシエスタが慌てた様子でこちらについてやって来
た。

「そんなに慌ててどうしたんだシエスタ」

「大変なんです！サイトさんが貴族の方に喧嘩を売ってしまったんです」

もう決闘入ったのか、そろそろだとは思ってはいたが。

「仕方ないな……」

そう言つと俺は厨房から出て行こうとする。

「どこに行くつもりですか？」

「サイトの所だけど？」

「行つてどうするんですか！？」

「よく考えて見てよシエスタ。俺には魔法があるんだぜ？さっき見せたのはほんの一部、もしもそれを全力で放つたら？」

「まさか……」

「そう言つこと。だから……」

「ちょっと貴族倒してきます」

俺がヴェストリの広場に着くとサイトは恐らくギーシュのゴーレム（ワルキューレだったっけ？）にボコボコにされていた。てかアレ？なんか才人VSギーシュ+なんかモブキャラ二人なんだけど……1対3はかなり不味いでしょ、才人も原作より酷い状態だし、これは俺が入るしかないか？

「はい失礼しまーす」

俺が割り込むとギーシュが

「なんだね君は」

俺は才人を指差して、

「俺はコイツと同じルイズの使い魔の皐月翔太だ」

「…ああ、そういえばルイズは平民を二人召喚したんだっけ。それで？君はまさかこの平民を助けにきたのかい？」

「そのつもりだけど？」

俺がそう言つと、辺りから笑い声が上がった。

「ちょっと正気なの！？」

ルイズが俺に言った

「大丈夫、勝算はある」

「平民が貴族に勝てるはずないじゃない」

とりあえずルイズは軽く無視するとして、俺は才人の所に駆け寄った。

「生きてるか？」

「…なんとかね」

「まだいけるか？」

「勿論」

「よし…それなら」

俺はギーシュに向きを変えると、

「えっと…ギーシュだっけ？」

「なんだい？」

「できれば剣をくれるとありがたいんだけど？」

「…まあいいだろう。僕も丸腰の平民を相手にするのは物足りないからね」

そう言ってギーシュは薔薇の花の形をした杖を振って剣を2本作り出すとそれを俺達の方に投げた

「ども。あともう一つ良いですかね？」

俺がそう言つとギーシュは若干苛立った様子で、

「まだなにかあるのかい」

「最初の一発は俺達の方からにして欲しいんだけど」

するとギーシュは少し考えていたが、

「……たかが平民の攻撃だからな」

と、言つてくれた。

「じゃあいきましょうか」

「さつさと来たまえ」

ギーシュが催促するので俺は剣を地面に突き刺して、懷からルイズの杖を取り出した。

「ちよつといつの間にとつたのよ!？」

「さつき」

俺はギーシュの方に向き直つた。

「平民がメイジの真似事か？」

ギーシュがなんか言ったようだが俺は気にせずに才人に言った

「才人、構えておけ」

「…ああ」

才人が剣を構えるのを確認して、俺は詠唱を始めた。

「天光満ところに我はあり」

その詠唱によりギーシュ達の真上に巨大な魔法陣が展開される。

「馬鹿な！？平民が魔法だと！？」

「黄泉の門開くところに汝有り」

更にギーシュ達の真下にも魔法陣が展開されると、流石に焦ったのかギーシュはゴーレムを七体作り出した。

「…って言うかこの詠唱ってまさか…」

才人はこれから俺が放つ魔法に気付いたようだ。

「出でよ、神の雷」

「こ、これはハッターだ！平民に魔法が使える訳がない！」
ギーシュが叫んだが時すでに遅し。

「とりあえず手加減はしてやる！『インディグネーション』《非殺傷》
『！』」

詠唱が完成し、裁きの雷がギーシュ達に降り注いだ。それにより、ゴーレムは完全に破壊され、ギーシュ達も突然の雷に驚いたらしく動かない。

「いまだ才人、あいつらの杖を落とせ」

「わかった」

才人は恐らくルーンの効果だろうか、もの凄いスピードでギーシュ達に接近した。

「ひっ！」

ギーシュはやつと気がついたようだが既に二人の杖を弾き飛ばしていた才人によって蹴り飛ばされた。

さらに才人はギーシュめがけてジャンプし、剣をギーシュの右横に突き立てた。

「続けるか？」

才人がそう呟くように言うと、ギーシュは首を振った。完全に戦意を喪失していた。

「ま、参った」

ギーシュが降参した直後に才人は糸が切れた人形のように倒れた。

「サイト！」

ルイズが駆け寄って才人の体を揺すった。どうやら死んではないようだ。まあこんな所で死ぬはずがないのはわかっていただけだ。

「さて、才人に回復の術でもかけておくか」

そう言っただけで俺は才人の前に立つと杖を振って呪文を唱える。

「キュア」

すると先ほどシエスタが唱えたファーストエイドとは比べ物にならないほどの癒やしの光が才人を包み、ほんの数秒で才人の傷はほとんどなくなった。

「ちょっとあんたいつまで私の杖持ってるのよ。早く返しなさい」

「そう言えばそうだったな」

と、俺はルイズに杖を返した。

すると、ギーシュが立ち上がって俺に問いかけた

「一体君達は何者なんだ？僕の『ワルキューレ』をほんの数秒で粉砕するなんて」

「ただの平民ですよ」

「ただの平民ならあんな凄い魔法が使える訳がない」

ギーシュがそう言っているとルイズも、

「そうよ！なんで平民のあんたが魔法を使えるのよ！」

「とりあえずそれは才人を運んでからにしようか。」

「それはそうね」

ルイズが納得したのでギーシュにレビテーションをかけてもらい、才人をルイズの部屋に運ぶことにした。

5話 薔薇と決闘（後書き）

ルイズの杖を借りたのは、杖無しで魔法を使うといろいろとまずいことになると思ったからです。

6話 休日と首都

「…と、言う訳です」

才人をルイズの部屋に運んだ後、約束通り俺がなぜ魔法を使えるのかを説明していたのだが…

「信じられないわ」

どうやらルイズはまだ信じてない様子

「信じてくれよ」

「じゃあ、そのマジックアイテムとやらを貸しなさいよ」

「仕方ないな…」

と、シエスタに渡した時と同様に腕輪を作って渡した

「へえ……本当にこんなので魔法が使えるの？」

「使える………と、思うよ」

「思うよってなによ!？」

「いや、だってそれ元々は魔法の使えない平民用だもん」

「それは…そうよね」

「さて、とりあえず才人に『ファーストエイド』って唱えてみて」
どうせ失敗するのは明らかなので才人を起こすのに利用させてもらおうかな。

「えーっと『ファーストエイド』!!」

ルイズがそう唱えると一瞬柔らかな光が見えたような気がしたが、その直後に才人を爆発が襲った

「ぐはっ」

才人は爆風に飛ばされて壁に叩きつけられた。

「キュア」

俺が回復の呪文を唱えなければ才人は原作ギーシュ戦以上のダメージを受けていただろう

「危ないなオイ!!」

才人は起き上がるとすぐに爆発を起こした張本人であるルイズに向かって叫んだ。

「スマン、ルイズに魔法を唱えるように言ったのは俺だ」

と、俺が謝ると

「…まあ翔太がいったなら悪気でやった訳じゃなさそうだし」

と言って許してくれた。いや、悪気は少しありました。

「で！？何でまた爆発するのよ！！」

ルイズが俺にそう怒鳴った

「最初に言ったじゃん、このマジックアイテムは元々平民用なんだってさ」

俺がそういうと、ルイズは若干おとなしくなった。

「そういえばなんで翔太は魔法を使えるんだ？っていうかあの呪文ってインディグネーションだよな？」

と、才人が質問をした

「あ、やっぱり才人ってテイルズ知ってるんだ」

「一応何作かやったことはあるよ」

「じゃあ質問するぞ、『この世に悪があるとすれば』？」

「それは人の心だ」
「だろ？」

「うん、わかってるみたいだね」

すると全然話についていけないルイズが、

「ちよつと、私にも分かるように説明しなさいよ！～ているずって何なの！？」

「あーすっかり忘れてた、じゃあルイズに分かるように説明しようかな」

それから数十分後…

「つまり、ているずっていうのは物語の総称で、決闘の時に出した雷は物語の中のものだって事ね？」

「飲み込みが早くて助かる」

今度はすんなりと信じてもらえたようだ。

「で、なんで翔太はあんな魔法をつかえたんだ？」

「よくわからないけど恐らくこのルーンのせいじゃないかな？」

と、俺は手に刻まれたルーンを見せる。

「でも俺も同じ形だぜ？」

才人も手のルーンを見せた。

「どうなんだ？ルイズ」

「そんなこと分らないわ。けど使い魔として契約したときに、特殊能力を得る事があるって聞いたことがあるから、それなのかしら」

「まあいずれわかるだろ」

と、一段落ついたので俺はあの話をしてみる。

「なあルイズ」

「なによ」

「なんか武器買ってくれないか？」

そう、あの話とはこの物語に欠かせないあの剣の購入イベントの事である

「んゝそうね」

ルイズは何か考えてから、

「いいわ、あんたたちに武器買ってあげる」

と、ずいぶんあっさりと答えた

「珍しい……」

才人がそう言うと、

「どうしてよ」

じろりとルイズが睨む。

「お前って、ケチだと思ってた。飯とかひどかったし」

「使い魔に贅沢させたら癖になるでしょ。必要なものはきちんと買うわよ。わたしは別にケチじゃないのよ」

ルイズは得意げに言った。

「で？いつ行くんだ？」

「次の虚無の曜日ね。」

「なるほど」

「わかったらさっさと寝る！明日はちゃんと起こすのよ！」

「あいよ」

なんだか1日しかたつてないのに何日も活動したみたいだ。そんなことを思いながら俺は眠りについた。

さて、それから虚無の曜日まで才人がキュルケに惚れられたりギーシュに勝ったのを偶然だと言ってきた雑魚どもを軽く潰してきたりしていたのだが……

なんだかんだで虚無の曜日になった。

こんなノリでいいんだろうか？

「いいんじゃない？」

だから地の文にツッコミをいれないで下さい。

…とにかく虚無の曜日である。

俺達はトリステインの城下町に馬で三時間ほどかけてやってきた。勿論テイルズに登場している乗り物も召喚できるので、いつそのことバンエルティア号でも召喚して一気に行きたい所だったが、置き場所がないので止めた。それに元の世界では馬に乗ることなんてなかったのだ、一度くらいは体験してみたいじゃないか。

「それにしても…」

「ああ」

俺と才人は口をそろえて、

「「狭いな」」

「狭いって、これでも大通りなんだけど」

「これは流石に無いわ、俺達の国でもこれの数倍はあるぞ」

「数倍って…どれだけの人口よ…」

「んゝ一億位？」

「お…億!？」

ルイズが驚くのも無理はない。確かこの世界の最大はガリアのリユテイスで30万人位(?)だったような気がする。それからしたら億なんて気の遠くなるような話だろう。

「まあこんな所にいるのも何だし早く武器屋に案内してくれ」

「そつ、そうね」

しばらくするとルイズはさらに狭い路地に入り、辺りをきよろきよろと見回した。

「ピエモンの秘薬屋の近くだったから、この辺りなんだけど……」

それから、一枚の看板を見つけ、嬉しそうに呟いた。

「あ、あつた」

見ると、剣の形をした看板が下がっていた。なるほど、武器屋っぽいな。

俺達は、石段を登り、羽扉をあけ、店の中に入った。

店に入るとパイプを加えていた店の主人が、入ってきたルイズを胡散臭さげに見つめていたが、紐タイ留めに描かれた五芒星に気づいた。それからパイプをはなし、ドスの利いた声を出した。

「旦那。貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや」

「客よ」

ルイズは腕を組んで言った。

「こりやおったまげた。貴族が剣を！おったまげた！」

「どうして？」

ルイズがそう聞くと、

「いえ、若奥様。坊主は聖具をふる、兵隊は剣をふる、貴族は杖をふる、そして陛下はバルコニーからお手をおふりになる、と相場は決まっておりますんで」

「使うのはわたしじゃないわ。使い魔よ」

「忘れておりました。昨今は貴族の使い魔も剣をふるようで」

主人は、商売つ気たつぷりにお愛想を言った。それから、俺と才人をじろじろと眺めた。

「剣をお使いになるのは、この方々で？」

ルイズは頷いた。

「わたしは剣のことなんかわからないから。適当に選んでちょうだ

い」

主人はいそいそと奥の倉庫に消えた。彼は聞こえないように、小声で呟いた。

「……こりゃ、鴨がネギしょってやってきたわい。せいぜい、高く売りつけるとしよう」

しばらくすると彼は1メートルほどの長さの、細身の剣を持って現れた。

随分、華奢な剣である。片手で扱うものらしく、短めの柄にハンドガードがついていた。

主人は思い出すように言った。

「そういや、昨今は宮廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たすのはやっておりましてね。そのさいにお選びになるのが、このようなレイピアでさあ」

なるほど、きらびやかな模様がついていて、貴族に似合いの綺麗な剣だった。

「貴族の間で、下僕に剣を持たすのがはやってる？」

ルイズは尋ねた。主人はもっともらしく頷いた。

「へえ、なんでも、最近このトリステインの城下町を、盗賊が荒らしております……」

「盗賊？」

「そうです。なんでも『土くれ』のフーケとかいう、メイジの盗賊が、貴族のお宝を散々盗みまくっているって。貴族の方々は恐れて、下僕にまで剣を持たせる始末で。へえ」

「『土くれ』のフーケねえ」

そつえばフーケ襲撃って今日だった気がする。まあ神様（笑）から貰ったチート紛いの能力もあるから負けないけどね。

さて、俺はあまりにも暇なので店内の武器を見ていたのだが、ある棚に飾られていた、この世界に有るはずのないものが俺の目に入る。

「おい、あれってまさか…」

俺は主人に言った。

「あれはどこで手にいれたんだ？」

「あれの事か？」

と、主人は少し言いにくそうに言った。

「あれは昔旅人がこの店にきて売ったものなんだが、何年か後に貴族が買っていったんだ」

「じゃあなんでまた店に戻って来たんだ？」

「それはあの剣が呪われているからさ。買われた次の年その貴族が剣から黒い魔獣が出たと言って死んじまったんだ」

「黒い魔獣って…」

「そんなの作り話に決まっているじゃない」

ルイズは信じる気はないようだ

「それから持ち主を転々として、どこかで最初の持ち主がここから買ってしまったのがわかったらしくここに売られたってわけだ」

「なるほど…」

だいたいわかった。黒い魔獣つてのも予想がつく。

「ちょっと触ってもいいかな？」

「別にいいが…それは元々は何かが引っかかって抜けないから観賞用として売ってたんだ、もしも抜くことが出来たら大したもんだよ」

「そーなのかー」

そして俺はその剣…いや、太刀といったほうがいいであろうそれを手に取った。

その瞬間突然左手のルーンが黒く輝いた。

『誰ダ……』

「!？」

気がつく俺は先程までいた武器屋ではなく、何もない真っ白な空間にいた。

「ここは…？」

『我ヲ呼ンダノハ才前力……』

声のした方を向くと

「やっぱりか……」

そこにはゼロ魔の世界に存在する筈のない生物

迅竜 ナルガクルガがいた。

6話 休日と首都（後書き）

さて、気づいたら数ヶ月放置してしまいました。

どうも、覚えてる人は皆無でしょうが絶^{ぜっ}華^かです。

まあ地震のせいだとか言い訳じみたこともあるのですがね

自然には勝てないということで

これからの更新についてなのですが、私自身仕事の関係で間が空くかもしれないが、気が向いたときに見ていただく程度で覚えておいていただけるとありがたいです。

それではまたいつか

と、いつでも次の話はほぼ完成しているのですが、ね。

感想、ご意見お待ちしております。

5 / 1 1 ガリアの人口書き忘れを修正 + 加筆

7話 魔剣と店主（前書き）

前回のあらすじ

デルフ購入イベントを果たしにトリスタニアへやってきた俺こと皋月翔太。

……しかし

なんでこの世界にモンハンのナルガクルガがいるんだ！？

7話 魔剣と店主

『モウ一度問ウ……我ヲンダノハ才前力?』

俺はいきなり出てきたこいつに戸惑っていた。

(ちょっとまってよ! 何でモンハンに登場するやつがゼロ魔の世界なんかにいるんだ? いや、今はそんなこと気にしてる場合じゃないな)

「いや…呼んだっていわれても、俺触れただけだし」

するとナルガクルガは俺をじっと見つめて、

『フン……ナルホド確力ニソノるーんナラ我ヲ目覚メサセル事モ出来ヨウ』

「ああ、ガンダールヴって武器の能力を完全に引き出すとかそういうのもあったっけ」

『マアソウイウ事ダ』

と、ナルガクルガっぽいのはなにやら思いついたようで、

『セツカク我ヲ目覚メサセル者ガ現レタンダ……才前名ハ?』

「臯月翔太だ」

『デハ翔太。コレヨリ我ハ才前ノ剣トナリ才前ノ道ヲ阻ム者ヲ全テ倒ス力ニナル事ヲ誓オウ』

「なんかいきなりな話だがこれから宜しく頼む」

すると、視界が最初にいた武器屋に戻った。

「どうしたんだ？それに触れた途端ばーっとして」

才人が心配そうに話しかけてきた。

「いや、何でもないよ」

そして俺はその太刀・夜刀【月影】 - の刀身を鞘から引き抜いた。

「まさか引き抜ける奴がいるなんて…」

店主は俺が引き抜いたことにとても驚いているようだ。

「で、試し斬りしたいんだけど…」

「あ、ああそれなら店の奥だ」

店主がそう言っていたので店の奥に行くと、そこにはいい感じの案山子があった。

「てかなんで案山子？まあいいけど」

俺は月影を構えて集中し……

「そこだっ！」

叫びと共に俺は案山子に斜めに斬撃を放ったのだが……

「何もおきねえな。しかたねえさ、長年抜いてないから切れ味が落ちたんだろ」

主人は溜め息をついた。何故なら案山子には傷一つついていなかったからだ。

「いや……手応えはあった」

そう言つて俺は案山子を指でつついた。

グラッ

すると、案山子は今切られたかのように斜めに崩れ落ちた。

「!?!」

主人は今起きた出来事が信じられないような様子で言葉も発せない。

「切れた事を相手に感じさせない程の切れ味か……」

俺は月影のあまりの切れ味にびっくりしていた。

すると、乱雑に積み上げられていた剣の中から、低い男の声がした。

「おでれーた！まさかあの剣がこんなにすごい切れ味だったとはな！」

ルイズと才人は声の方を向き、俺は

「なんだ、そこにいたのか…」

と、小さく呟き、主人は頭を抱えた。

才人は、つかつかと声のする方に近づいた。

「なんだよ。だれもないじゃん」

「おめえの目は節穴か！」

才人は後ずさった。まあ仕方ないか。元の世界じゃお目にかかれな
いしゃべる剣がいたんだから。

「剣がしゃべった！」

才人がそう言うと、店の主人が怒鳴り声を上げた。

「やい！デル公！折角感動してた所を邪魔するんじゃないやねえ！」

「デル公？」

才人は、その剣をまじまじと見つめた。

「それって、インテリジェンスソード？」

ルイズが、当惑した声を上げた。

「そうでさ、若奥様。意志を持つ魔剣、インテリジェンスソードでさ。いったい、どこの魔術師が始めたんでしょかねえ、剣をしゃべらせるなんて……。とにかく、こいつはやたらと口は悪いわ、客にケンカは売るわで閉口してまして……。やいデル公！これ以上余計な口を聞くな、貴族に頼んでてめえを溶かしちまうからな！」

「おもしれえ！やってみろ！どうせこの世にやもう、飽き飽きしていたところさ！溶かしてくれるんなら、上等だ！」

「やってやらあ！」

主人が歩き出した。しかし、俺はそれを遮る。

「待てよ。しゃべる剣なんて面白いじゃないか」

それから俺はデルフを手を取った。

「えーっと、確かデルフリンガーだったよな？」

「おめえ、なんで俺の名前を知ってやがんだ？」

そしてデルフは俺のルーンに気付く。

「なんだおめえ『使い手』か？いや、確かに『使い手』なんだがどこが違うな。なにもんだおめえ」

「さてね、君の求めている本来の『使い手』はそっちの才人だよ」

と、いつて俺は才人にデルフを渡す。

「おでれーた。ほんとに『使い手』かよ。見損なつてたぜ」

「なあ『使い手』ってなんなんだ？」

才人がデルフに質問をするが、

「ふん、自分の実力も知らんのか。まあいい。てめ、俺を買え」

「買つよ」

才人がそう言うのと剣は黙りこくつた。

「ルイズ。これにしたい」

才人がそう言うと、ルイズはいやそうな声をあげた。

「えゝゝゝ。そんなのにするの？もつと綺麗でしゃべらないのになさいよ」

「いいじゃんかよ。しゃべる剣なんて面白い」

「それだけじゃないの」

ルイズはぶつくさ文句を言ったが、なんか他に買えそうな剣もなかったので、主人に尋ねた。

「あれ、おいくら？」

「あれなら、百エキュで結構でさ」

「安いじゃない」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなもんでさ」

主人は手をひらひらと振りながら言った。

「じゃあついでにこれも買いたいんだけど」

そう言つて俺は月影をカウンターの上に置く。

「普通なら千エキュはもらいてえ所だが、すげえ物を見せてもらった礼だ。特別に二百でいいぜ」

「まじか！ありがとう」

そして俺は懐からお金を取り出して主人に渡した。

「ちよつとあんたいつの間にそんなお金持ってたのよ!？」

「へ？勿論喧嘩売ってきた学院の生徒を返り討ちにした後に合法的にもらったものだけど？」

俺がそう言つとルイズはため息をついた。

「ま、まあいいじゃないか。こうして剣も買えたんだし。」

「まあそうだな」

買い物が終わったので、俺たちは店から出ようとしたが、

（そう言えばこの後キュルケが買い物にくるんだっけ）

と思い出したのでルイズに

「ちょっと先行ってて」

そう言ってから俺は主人に言った。

「この後に赤髪の貴族の女の子が何か買いに来ると思うからくれぐれも使えない物を売らないようにしてくれ」

「へえ、まああんたがそう言うなら出来るだけ気をつけますよ」

「では、俺はこの辺で」

「おう、また来てくれよ」

「じゃあいい商品揃えてて下さいね」

そう言って俺は店を後にした。

7話 魔剣と店主（後書き）

そつえば最近マイソロ3の二週目をはじめてみました。

アレって割と難易度マニアでも簡単なのね。

6 / 1 1 ナルガクルガ（？）との会話の一部変更

番外その一 店主と赤髪（前書き）

ちよつとがんばって主人公サイドとは別のを作ってみました。

番外その一 店主と赤髪

SIDE - 店主 -

いやあ、久々に凄い物を見れた。

まさかあの呪いの剣を抜ける奴が現れるとはな。

あの剣を売りにきた旅人が

「いつか、こいつにふさわしい使い手が現れるよ」

とか言ってたが本当だったな。

おっと、客だ。

戸をくぐって来たのはあの兄さんの言う通りに赤髪の貴族の娘だった。

「おや！今日はどうかしてる！また貴族だ！」

「ねえご主人」

赤髪キユルケの貴族は髪をかきあげると、色っぽく笑った。なんかあれだ、色気が熱波として襲ってくるようだったな。

「今の貴族が、何を買っていったかご存知？」

あの桃色娘の事か。

「へ、へえ。剣でさ」

「なるほど、やっぱり剣ね……。どんな剣を買っていったの？」

「へえ。ボロボロの大剣でさあ。」

まあ間違っではないない。魔剣の方はあの兄さんが支払ったからな。

「ボロボロ？どうして？」

「はあ。お連れの方がその剣を気に入ったもんでさ」

「きつと彼は懷事情がわかっていてそんな剣にしたんだわ」

そう言って赤いのは手を顎の下にかまえ、おっほっほ！と大声で笑った。

「貧乏ね！ヴァリエール！公爵家が泣くわよ！」

「若奥様も、剣をお買い求めで？」

俺は、商売のチャンスだとばかりに身を乗り出した。今度の貴族の娘は、どうやらさっきのやせっぱちにくらべて、胸も財布の中身も豊かなようだ。

「ええ。見繕ってくださいな」

俺は揉み手しながら店の奥に行った。さて、さっきの兄さんから使えない物売らないように、と言われたからな、残念だ。せつかく

ゲルマニアのスーパー卿が鍛えたとかいう装飾剣があったから高く売ろうと思ったんだが。

しばらくして俺は剣と銃が合体した、刃の部分に獅子が彫られていた剣を持っていた。

「あら。随分と不思議な剣ね」

「若奥様。この剣は昔旅人が店に売りにきたものでしてね。よくわからない構造なんです、切れ味だけは保証しますよ」

「うーん。もっと綺麗なのではないの？」

すると後にいた青い髪タバサの小さいのが

「見た目より質」

この小さいのは見る目がありそうだ。

「確かにそうね」

赤いのは頷いた。

「おいくら？」

俺は、キュルケを値踏みした。どうやらさっきの貴族より羽振りは良さそうだ。

「へえ。エキュー金貨で三千五百でさあ」

「ちょっと高くない？」

赤いののが上がった。

「へえ、名剣は、釣り合う黄金を要求するもんでさ」

赤いのはちょっと考え込むと、俺の顔に体を近づけた。

「ご主人……、ちょっとお値段が張りすぎじゃございせんこと？」

顎の下を赤いのが手で撫でられて、俺は呼吸が出来なくなった。

ものすごい色気が、俺の脳髓を直撃する。

「へ、へえ……。名剣は……」

もう一度同じ事を言おうとしたら、赤いのはカウンターの上に腰かけて、左足を持ち上げる。

「お値段、張りすぎじゃ、ございせんこと？」

ゆっくりと、投げ出した足をカウンターの上に持ち上げたもんだから、俺の目はその太腿に釘付けになった。

「さ、さようで？では、二千八百……」

赤いのが足が、さらに持ち上がった。太腿の奥が、もう少しで見えそう。

「いえ、二千五百で結構でさ！」

「暑いわね……」

赤いのは答えずに、シャツのボタンを外し始めた。

「シャツ、脱いでしまおうかしら……。よろしくて？ご主人」

そして俺に、熱っぽい流し目を送った。

「おお、お値段を間違えておりました！二千で！へえ」

赤いのはシャツのボタンを一個外してから、俺の顔を見上げる。

「千八百で！へえ！」

再び、一個外した。胸の谷間が、あらわになる。それからまた、俺の顔を見上げた。

「千六百で！へえ！」

すると赤いのはボタンを外す指を止めると、今度はスカートの裾を持ち上げようとした。その指が途中で止まる。あと少しで見えそう
だ。

「千よ」

赤いのは言い放った。再び、するするとスカートの裾が持ち上がる。

そしてその指がぴたっと止まる。

「あ、ああ……」

赤いのはスカートの裾を戻し始めた。そして、希望の値段を繰り返して告げた。

「千」

「へえ！千で結構でさ！」

俺がそう言つとカウンターからすつと降りて、さらさらと小切手を書いた。

「買ったわ」

そして、剣を掴むと、さつさと店を出ていった。

俺は、呆然として、カウンターの小切手を見つめて、急激に冷静さを取り戻した。

「少しは値段を高めにしようと思ったが、色気に負けちゃったぜ」

すると、また店の扉が開いた。今度は貴族ではなかった。

さて、気を取り直して行きますかね。

SIDE・店主・完

番外その一 店主と赤髪（後書き）

絶華（以下絶）「この小説を読んでくれてる皆さんどうも、作者の絶華です」

翔太（以下翔）「誰も見てないと思うがな。主人公の翔太だ」

絶「酷っ！」

翔「それになんだこの文は。八割位原作トレース過ぎるだろ」

絶「いや、最初はどんな感じが確かめようと思って」

翔「じゃあいつオリジナリティ溢れる文章になるんだ？」

絶「とりあえず原作一巻はこのまま最後まで突っ走るからその後かな？」

翔「かな？つておい」

絶「ま、気楽にまっつて下さい」

翔「コイツがいつ更新するかは解らないけどな」

絶「うぐっ…。それは言わないで欲しいな」

翔「だってお前の制作スピードって、『ウサギとかめ』のウサギの

怠けっぷりとかめの遅さのハイブリッドじゃん」

絶「ハイブリッド言っな」

翔「本当の事だろ」

絶「まあそっなんだけど」

翔「自覚有るならさっさと制作しろ！」

絶「ちょ！月影出さないで！」

翔「問答無用！」

絶「ぎゃあああああ」

完…？

こんな駄作ですが、精一杯努力して並の文章まで出来る様になりました。
いものです。

疑問点等有りましたらコメントよろしくお願いします。

8話 塔と怪盗（前書き）

前回のあらすじ

まさか夜刀【月影】が売っているなんて思いもよらなかった俺こと
皐月翔太。

でも、大変なのはこれからなのか？

8話 塔と怪盗

トリステイン魔法学院 - 夜 -

「……才人」

「なんだ？」

「なんで俺らはこんな状態なんだ？」

現在高い所からロープで吊られている状態である。

「まあ状況を整理してみるか」

あれはそう…、デルフと月影を買って学院に戻った1時間後くらいだったかな？

- 回想 -

戻ってきて落ち着いた辺りでキュルケが乱入してきたんだっけな。

まさかあんな物まで売ってるとは……武器屋恐るべし。

「なあ翔太、これって…」

「多分考えてる物と同じだと思うよ。」

キュルケが買ってきた物は、某最終幻想に出てきたガンブレード・リボルバー - だった。

「あら？珍しい剣だから買ってきたけど知ってるの？」

「まあそれなりにはね。それよりもこの剣買った時に銃の弾みたいなものもついてこなかった？」

「いえ、剣だけだったわ」

無いのか……。ガンブレードって銃弾が無ければただの剣じゃね？

などと思っているとキュルケが、

「と、言うわけであたしの買ってきた剣を使ってほしいの」

と言ったので、ルイズはキュルケに言い返した。

「おあいにくさま。使い魔の使う道具なら間に合ってるの。ねえ、サイト」

しかし、才人はそんなルイズの言葉とは裏腹に、キュルケが買ってきた剣に夢中だった。

「まさかこんな所にきてこれを見るなんて思っても無かった」

ルイズはそんな才人を蹴飛ばした。

「なにすんだよ！」

「返しなさい。あんたには、あの喋るのがあるじゃない」

「いや、確かにあれは喋って面白いけど……」

才人のいう通りデルフは確かに面白い……しかし使うとなると錆びているデルフよりはこっちのガンブレードの方がいいに決まってる。

「嫉妬はみつともないわよ？ヴァリエール」

キュルケは、勝ち誇った様子でそう言った。

「嫉妬？誰が嫉妬してるのよ！」

「そうじゃない。あなたの買った剣よりも凄そうな奴を、あたしがなんなく手に入れてプレゼントしたもんだから、嫉妬してるんじゃないかって？」

「誰がよ！やめてよね！ツエルプストーの者からは豆の一粒だって恵んでもらいたくない！そんだけよ！」

それに、とルイズは言葉を続ける。

「あんだなんかただの色ボケじゃない！ゲルマニアで男を漁りすぎて相手にされなくなっただから、トリスティンまで留学してきたんで

しょ？」

ルイズは冷たい笑みを浮かべて、キュルケを挑発した。声が震えている。相当頭にきているようだ。

「言ってくれるわね。ヴァリエール……」

キュルケの顔色が変わった。ルイズが勝ち誇ったように言った。

「なによ。ホントのことでしょう？」

二人は同時に自分の杖に手をかけた。

その時、それまでじっと本を読んでいたタバサが、二人より早く自分の杖を振る。するとつむじ風が舞い上がり、キュルケとルイズの手から、杖を吹き飛ばした。

「室内」

タバサは淡々と言った。ここでやったら危険であると言いたいのだろう。

「なにこの子。さっきからいるけど」

ルイズが忌々しげに呟いた。本当にいつの間に来たのやら。

「あたしの友達よ」

「なんで、あんたの友達がわたしの部屋にいるのよ」

キュルケは、ぐつとルイズを睨んだ。

「いいじゃない」

「どうもこんばんは」

俺はじつと本を読んでいるタバサに声をかけてみたが、返事はない。本のページを黙々とめくっている。

いまだにルイズとキュルケはぐつと睨み合ったままだ。キュルケが視線を逸らして言った。

「じゃあ、サイトに決めてもらいましょうか」

「へ？俺？」

いきなり振られた才人は戸惑っている。

「そうよ。あんたの剣でモメてんだから」

ルイズもぐつと睨んだ。才人は悩んでいる。

（実際の所デルフの方が能力的に上か？いや、ガンブレードも捨てがたい）

そんな風に考えていると、才人は、答えを決めたようだ。

「二本とも、ってだめかな？」

才人はてへつと可愛く頭をかいた。正直きめえ。

すると才人は二人に同時に蹴られて、床に転がった。

「ねえ」

キュルケはルイズに向き直った。

「なによ」

「そろそろ、決着をつけませんこと?」

「そうね」

「あたしね、あんたのこと、だいつきらいなのよ」

「あら、わたしもよ」

「気が合っわね」

キュルケは微笑んだあと、目を吊り上げた。

ルイズも、負けじと（無い）胸を張った。

「げふう」

その瞬間ルイズの蹴りが俺の腹におもいつきり入った。

「誰が無い胸よ!」

ルイズ、お前心が読めるのか……………。

そして俺は意識を失った。

―回想　E N D―

「て、感じだつたな」

結局の所、俺が吊るされてるのは自業自得だったというわけだ。情けない。

「と言うつかお前ら本気か？」

才人は情けない声で言ったが、返事をするものは誰もいなかった。何故かと言うと現在俺たちが吊るされてるのは実は塔の上だったりする。はるか地面の下には、小さくキュルケとルイズの姿が見える。夜とはいえ、二つの月のおかげでかなり視界は明るい。塔の屋上には、ウィンドドラゴン《シルフィード》に跨がったタバサの姿が見えた。風竜は、二本の剣をくわえている。

二つの月だけが、優しく俺たちを照らしていた。

キュルケとルイズは、地面に立って俺たちを見上げていた。ロープに縛られ、上から吊るされていた俺たちが、小さく揺れているのが二人の目に見えた。

キュルケが腕を組んで言った。

「いいこと？ヴァリエール。あのロープを切って、二人を地面に落とした方が勝ちよ。勝った方の剣をサイトが使う。いいわね？」

「わかったわ」

ルイズは硬い表情で頷いた。

「使う魔法は自由。ただし、あたしは後攻。そのくらいはハンデよ」
「いいわ」

ルイズは悩んだ後、ルーンを呟き、気合いを入れて杖を振った。

確か『ファイヤーボール』を唱えた筈だ。しかし火球が出る事はなく、一瞬遅れて、俺たちの後の壁が爆発した。

爆風で俺たちの体が揺れる。

「殺す気か！」

と、才人が怒鳴った。

そして爆発の直撃を受けた塔の壁にはヒビが入っている。

下を見るとキュルケは腹を抱えて笑っていた。

「ゼロ！ゼロのルイズ！ロープじゃなくて壁を爆発させてどうするの！器用ね！」

ルイズは無然とした。

「あなたって、どんな魔法を使っても爆発させるんだから！あつはっは！」

ルイズは悔しそうに拳を握り締めると、膝をついた。

「さて、私の番ね……」

キュルケは、狩人の目で俺たちを吊るしたロープを見据えた。タバサがロープを揺らしているので、狙いがつけづらい。てか揺れすぎてなんか気持ち悪い。

キュルケはルーンを呟き、手慣れた仕草で杖を突き出す。すると杖の先からメロンほどの大きさの火球が現れ、ロープめがけて飛んだ。火球は狙いたがわずロープにぶつかり、一瞬でロープを燃やし尽くした。

ロープが燃えた事で俺たちは地面に落ちる。そのとき、屋上にいたタバサが杖を振って俺たちに『レベテーション』をかける。そのおかげで、俺たちはゆっくりと地面に降りることができた。

キュルケは勝ち誇って、笑い声をあげた。

「あたしの勝ちね！ヴァリエール！」

ルイズはしょぼんとして座り込み、地面の草をむしり始めた。

「キュルケ、もうこのロープ解いていいか？」

俺がキュルケにそう言つと、

「ええ、良いわよ」

「解くつて……身動きがとれないのか？」

才人が俺に質問する。

「大丈夫だつて、『ウィンドカッター』《少》！」

すると小さな風の刃がロープを切り裂いた。ふう、やっと自由に動けるよ。

「この前の決闘の時の雷もそうだけど、あなたって風のメイジなの？」

キュルケが尋ねた。ああそうか、説明したのはルイズだけだったな。

「えーつと……」

と、その時背後に巨大な何かの気配を感じて、俺たちは振り返った。

「な、なにこれ！」

キュルケは口を大きく開けた。なんと、巨大なゴーレムがこちらに歩いてきた！

「きゃあああああああ！」

キュルケは悲鳴を上げて逃げ出した。

「逃げ足速っ！……いや、今はそんな状況じゃないか」

俺はゴーレムに気付いていないルイズを抱えると、全力で走った。

「いきなりなんなのよ！」

「それはあれを見てからにしてくれ！」

「あれって……土ゴーレム？……あんな大きな土ゴーレムを操れるなんて、きっとトライアングルクラスのメイジに違いないわ」

「トライアングルクラスねえ……」

「とにかくおろしなさいよ！」

ルイズがもがいたせいで俺はバランスを崩して転んだ、さらにゴーレムの足がその上に落ちてくる。

「！」

間一髪、タバサのウィンドドラゴンが滑り込んだ。俺たちを両足でがっしり掴むと、ゴーレムの足と地面の間をすり抜ける。

そして今までいたところに、ずしん！と音を立ててゴーレムの足がめり込む。

ウィンドドラゴンの足にぶら下がった俺たちは、上空からゴーレムを見下ろした。肩の辺りに黒いロープのメイジが乗っている。おそらく土くれのフーケだろう。

しばらくするとゴーレムは先ほどルイズの爆発が直撃して、ヒビの入っている辺りに拳を打ち下ろした。壁に拳がめり込む。バカッと鈍い音がして、壁が崩れる。

「以外と簡単に穴が空くんだな」

「そんなはずないわ、だって壁には固定化の呪文がかけてあるもの！」

俺の疑問にルイズが答えた。

「じゃあ偶然だとしても？たしかあの辺りはさっきお前が爆発を起こしてヒビが入っていたような気がしたんだけどなぁ？」

俺はわざとらしくルイズに言う。

「偶然よ……………多分」

ルイズは多少落ち込んだ様だ。なにしろ、フーケの盗みを手伝ったようなものだからな。

「っと、泥棒さんが出てくるようだぜ？」

黒いローブのメイジは、宝物庫の中から出てくると、再びゴーレムに乗り、動きだした。魔法学院の城壁をひとまたぎで乗り越え、ずしんずしんと地鳴りを立てて草原を歩いていく。そして草原の真ん中辺りに差し掛かったとき、巨大なゴーレムは、突然ぐしゃつと崩れ落ちた。

俺たちは地面に降りたが、月明かりに照らされたこんもりと小山のように盛り上がった土山以外には何も無い。

ゴーレムの肩に乗っていた黒ローブのメイジの姿は、消え失せていた。

8話 塔と怪盗（後書き）

絶華（ぜっか／作者：以下絶）「どうも、このままだと月1更新になりそうで怖い！と思っているかもしれない絶華です」

翔太（しょうた／主人公：以下翔）「どうも、更新速度次第なら作者を逆さ吊りにしてやろうかと思ってる皐月翔太だ」

絶「逆さ吊り！？」

翔「ああそうだ、場所は今回俺達が吊られた所と同じね」

絶「いや無理！！俺、高所恐怖症だもの！！」

翔「じゃあとつとと書けや。大体こっちが進んでないのによく新しいの書く気になったな」

絶「とある憑依の現実操作リアルオペレートの事か？」

翔「勿論」

絶「いやゝなんかノリで」

翔「ノリでって………はあ、もういいや」

絶「何が？」

翔「相手にするのも馬鹿らしくなってきた」

絶「酷っ！」

翔「はいはい、それじゃあ次回予告やるぞ」

絶「了解っ！遂にフーケとのバトルになりそうな予感？原作一巻編も残り僅か！次回『決戦と変化』！」

翔「次回もよろしく」

本当に月に3回位は更新したいものです。

感想等お待ちしております。

9話 決戦と変化(前)(前書き)

前回のあらすじ的な

なぜか高いところからつるされていた俺こと皐月翔太。

ちょ、ゴーレムきたんですけど!?

9話 決戦と変化(前)

トリスティン某所の森・昼・

さて、あの後原作通りにイベントを通過して、現在俺たちは『破壊の杖』奪還大作戦の為に馬車でフーケのアジトとやらに向かっている。

「ええとミス・ロングビル、着くまではどのくらいあるんでしたっけ？」

俺は学院長オスマン氏の秘書のミス・ロングビルに質問をした。

「4時間ほどですね」

「確か朝から出掛けて調べてきたんですよ？お疲れ様です。」

「いえ、これも仕事ですから」

「そうですか」

俺はミス・ロングビルに礼を言うと、馬車の端に座った。

『ソコノろんぐびるガふうけナノダロウ？ナゼ言ッテヤラナイノダ？』

月影が頭に直接語りかける。こいつはどうやらテレパシー的なもので意志疎通ができるらしい。直接喋ればいいのに……ってそうか、

デルフみたいに口が無いんだよな。不便な事だ。

『シナリオ通りに進んでいるからいいんだよ』

と、俺は月影の質問に答えた。

『しなりお？』

『まあそんなに深く考えることじゃないよ』

と、それから数時間して馬車は深い森に入ってしまった。鬱蒼とした森が、恐怖をあおる。昼間だというのに薄暗く、気味が悪い。

「ここから先は、徒歩で行きましょう」

ミス・ロングビルがそう言って、全員が馬車から降りた。

「じゃあダーリン。これ使ってね？」

キュルケは色気たっぷり流し目を才人に送ると、自分が買ってきた剣を手渡した。

「あ、ああ……」

才人はそれを受け取った。

「勝負に勝ったのはあたし。文句は無いわよね？ゼロのルイズ」

ルイズは、ちらっと二人の様子を見たが、何も言わなかった。

さて、しばらく森の中を歩くと開けた場所に出た。森の中の空き地といったかんじかな。およそ、魔法学院の中庭ぐらいの広さだ。見ると、真ん中に廃屋があつた。

「わたくしの聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

ミス・ロングビルが廃屋を指差して言った。

『聞イタ情報ネエ……』

『まあ誰に聞いたんだよ！って感じだよな』

まあここでじっとしているのもあれなので、俺たちはゆっくりと相談を始めた。

その結果、偵察兼囃が小屋のそばに赴いて中の様子を確認する事になった。

「で、偵察兼囃は誰がやるの？」

才人がそう尋ねるとタバサは短く言った。

「すばしっこいの」

すると俺以外の全員が一斉に才人を見つめる。才人はため息をついて言った。

「俺かよ」

才人はキュルケからもらった剣を鞘から抜いた。

「才人だけだと心配だから俺も行かせてもらう」

俺はそう言つて月影を鞘から抜く。すると才人と同様にルーンが光り、体が軽くなる。

準備が出来た所で俺と才人は一足飛びに小屋の側まで近付き、窓から中を覗いてみた。

……誰もいないようだ。

無人なのを確認した俺たちは頭の上で腕を交差させた。誰もいなかったときの場合のサインである。

隠れていた全員が、恐る恐る近寄ってきた。

「誰もいないよ」

才人が窓を指差して言った。

タバサが、ドアに向けて杖を振った。

「ワナは無いみたい」

そう呟いて、ドアをあけ、中に入っていく。

キュルケと才人が後に続く。

ルイズは外で見張りをすると言ったので、『破壊の杖』が何だかわ

かっている俺も外で見張りをする事にした。

ミス・ロングビルは辺りを偵察してきますと言って、森の中に消えた。

「……なんで志願したんだ？」

才人達が戻って来るまでの間暇なので、俺はルイズに質問する事にした。

「なんでって……フーケを捕まえれば、誰ももう私をゼロのルイズとは呼ばないでしょ！」

そう言ったルイズの目は真剣だった。

「そうか……」

俺はそんなルイズに返す言葉がなかった。

そんな時、突然森の中からフーケの土ゴーレムの姿が現れてこちらに向けて拳を振り下ろした。

ばこおーんという音を立てて小屋の屋根が吹き飛ぶ。

「ゴーレム！」

小屋の中にいたキュルケが叫んだ。

タバサは自分の身長より大きな杖を振り、呪文を唱えた。巨大な竜巻が舞い上がり、ゴーレムにぶつかっていく。

しかし、ゴーレムはびくともしない。

キュルケも胸にさした杖を引き抜き、呪文を唱えた。

杖から炎が伸び、ゴーレムを火炎が包む。しかし、炎に包まれようが、ゴーレムはまったく意に介さない。

「無理よこんなの！」

「退却」

タバサが呟く。

キュルケとタバサは一目散に逃げ出し始めた。

俺もルイズを逃がそうとするが、ルイズは逃げようとしなない。

「ルイズ！逃げるぞ！」

いつの間にか合流した才人がルイズに言った。

「いやよ！わたしにもささやかだけどプライドってもんがあるの！ここで逃げたら、ゼロのルイズだから逃げたって言われるわ！」

「そんなの言わせておけばいいさ」

俺がそう言つと、

「私は貴族よ。魔法が使える者を、貴族と呼ぶんじゃないわ」

ルイズは杖を握りしめた。

「敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのよ！」

俺たちに気付いたゴーレムの足が持ち上がり、俺たちを踏み潰そうとした。ルイズは魔法を詠唱し、杖を振る。

しかし……、やはりゴーレムには全く通用しない。ファイヤーボールでも唱えたんだろうが、失敗したようだ。かろうじてゴーレムの胸が小さく爆発するのが見えたが、それだけだ。

「っ！」

俺はルイズを抱えて大きく後ろに跳んだ。その直後、さっきまでいた場所にゴーレムの足がめり込んだ。

「お前は馬鹿か、プライド以前に死んだら終わりだろうが！」

ルイズの目から、ぼろぼろと涙がこぼれた。

「泣くなよ！」

「だって、悔しくて……。わたし……。いつもバカにされて……」

ルイズは端正な顔をぐしゃぐしゃに歪めて泣いていた。子供みただった。

しかし今は泣き出したルイズに付き合っている場合じゃない。

振り向くと巨大なゴーレムが大きな拳を振り上げている。

「才人！とりあえず逃げるぞ！」

「少しはしんみりさせろよ！」

才人にルイズを抱えさせて、俺たちは走り出した。

ゴーレムは大きいだけで動きは遅く、俺たちが走るスピードと余り変わらなかった。

風竜が俺たちを救うために飛んできた。俺たちの目の前に着陸する。

「乗って！」

風竜に跨がったタバサが叫んだ。才人はルイズを風竜の上に押し上げた。

「あなたたちも早く」

タバサが珍しく、焦った様子で俺たちに言った。

しかし俺と才人は、風竜に乗らずに、迫り来るゴーレムに向き直った。

「サイト！シヨウタ！」

ドラゴンに跨がったルイズが怒鳴った。

「早く行け！」

タバサは無表情に俺たちを見つめていたが、追いついてきたゴーレムが拳を振り上げるのを見て、やむなく風竜を飛び上がらせた。

ドゴツ！

間一髪、風圧と共に、俺たちがいた地面にゴーレムの拳がめり込む。ゴーレムは拳を持ち上げた。ずぼつと地面からゴーレムの拳が抜けると、直径１メートルほどの大穴が出来ていた。

「怖かったら逃げてもいいんだぜ？」

俺は冗談混じりに才人に言う。

「誰が逃げるかよ、たかが土くれじゃねえか」

才人は剣をぐつと握りしめる。

「こちとら、ゼロのルイズの使い魔だつつつの」

「ならとつと片付けるぞ」

そして、俺たちは再度武器を構え、ゴーレムに突っ込んでいく。

9話 決戦と変化（前）（後書き）

今回はまさかまさかの前後編

後編は早めになる予定。

というか9割ほどできてます。

感想、疑問点、ダメ出し等お待ちしております。

10話 決戦と変化（後）（前書き）

前回のあらすじ

『破壊の杖』奪還戦に参加した俺こと皐月翔太。

いや、やっぱりゴーレムでかいなあ。

10話 決戦と変化（後）

ゴーレムの拳がうなりをあげて飛んでくる。その拳は途中で鋼鉄の塊に変わる。

才人は剣で受け止めるが、ガキーンと鈍い音がして、剣は真っ二つに折れた。

「折れた！？」

ガンブレードが折れたって何で………ってまさかアレって某最終幻想12のギルガメッシュの奴か？だったら折れるのも納得するかも知れないな。5ならともかく12のアイツの持つてるのって基本的に偽物だし。

ゴーレムの拳がうなる。才人は跳んでそれをかわした。

「こんなことならデルフも持つて来るんだった！」

才人が叫んだ。

「才人！とりあえず離れとけ！」

俺は才人に言いつつ、月影でゴーレムに立ち向かう。

「無影衝！！」

無数の斬撃がゴーレムの腕を切り裂くが、ゴーレムの腕は瞬時に再生する。

「やっぱり無理か」

物理攻撃が無効だと悟った俺はゴーレムと距離をとり、呪文の詠唱を始める。

「恐慌たる烈風…さあ、逃げろ『ファイアフルストーム』！」

壊滅的な威力の嵐がゴーレムに大きなダメージを与えるが、それも一時の事で、十数秒の間に元に戻ってしまう。

『攻撃が通ラナイガドウスル？』

『どうしようもないな』

するとその時いつの間につけてたのかは知らないが、才人が『破壊の杖』を構えて俺に叫んだ。

「翔太！射線上から離れろ！」

俺は言われた通りにする。

ゴーレムがずしんずしんと地響きをたて、俺たちに迫る。

才人は『破壊の杖』の安全装置を解き、トリガーを押した。

しゅぼつと栓抜きのような音がして、白煙を引きながら羽をつけたロケット状のものがゴーレムに吸い込まれる。

吸い込まれた弾頭がゴーレムの体にめり込み、そこで信管を作動さ

せ爆発する。

俺は思わず目をつむった。

耳をつんざくような爆音が響き、ゴーレムの上半身がばらばらに飛び散った。土の塊が雨のように辺りに降り注ぐ。

俺がゆっくりと目を開くと、白い煙の中にゴーレムの下半身だけが立っていた。

下半身だけになったゴーレムは一步前に踏み出そうとしたが、がくと膝が折れ、そのまま動かなくなった。

そして、滝のように腰の部分から崩れ落ちてただの土の塊に還っていく。

この前と同じように、後には土の小山が残された。

いつの間にか才人の横にいたルイズはその様子を呆然として見つめていたが、腰が抜けたのかへなへなと崩れ落ちた。

木陰に隠れていたキュルケが才人に駆け寄って行くのが見えた。

俺は大きく伸びをした。

キュルケが才人に抱きついた。

「サイト！すごいわ！やっぱりダーリンね！」

ウィンドドラゴンから降りたタバサが、崩れ落ちたフーケのゴーレムを見つめながら呟いた。

「フーケはどこ？」

俺以外の全員は、一斉にはっとした。

辺りを偵察（笑）しに行っていたミス・ロングビルが茂みの中から現れた。

「ミス・ロングビル！フーケはどこからあのゴーレムを操っていたのかしら？」

キュルケがそう尋ねると、ミス・ロングビルはわからないというように首を振り、才人の手から『破壊の杖』を2つ取り上げた。……まで、2つだと？まさか俺の介入のせいで2つにふえたのか？まずいな

「ロングビルさん？」

才人は怪訝に思っ、ミス・ロングビルの顔を見つめていた。

ミス・ロングビルはずっと遠のくと、俺たちに才人が使っていない方の『破壊の杖』を突きつけた。

「ご苦勞様」

「ミス・ロングビル！」

キュルケが叫んだ。

「どういう事ですか？」

ルイズも啞然として、ミス・ロングビルを見つめていた。

「ルイズ、こいつがフーケだ」

俺がそう言つとミス・ロングビル……いや、『土くれ』のフーケは眼鏡を外した。優しそだった目がつり上がり、猛禽類のような目つきに変わる。

「そう、私が『土くれ』のフーケさ。何でわかつたんだい？」

「実の所最初から」

俺がそう言つとみんな驚いていた様子だった。

「よく考えてみるよ、片道4時間、往復で8時間か。朝から出掛けて調べたとか言っていたが、戻ってくるのが早すぎるだろ？」

「そう考えればそうね」

ルイズ達は納得したようだ。当のフーケはしまった！といったような顔をしている。

「わたしも少し考えが足りなかったね。こんな子供に正体がバレるなんてさ」

タバサが隙をついて杖を振ろうとした。

「おっと。動かないで？破壊の杖は、ぴったりあなたたちを狙っているわ。全員、杖を遠くに投げなさい」

仕方なく、ルイズたちは杖を放り投げた。これでもう、メイジは魔法を唱える事が出来ないのだ。

「その使い魔君たちは武器を投げなさい。あんたたちは武器を握っている、どうやら素早くなるみたいだから」

俺と才人は言われたとおりにした。

「どうして!？」

ルイズがそう怒鳴るとフーケは、

「そうね、ちゃんと説明しなくちゃ死にきれないでしょうから……説明し「その必要はないぜ」…なんですよ」

「別に説明しなくてもわかるさ。大方、盗み出したものの使い方がわからなかったんだろ？で、俺たちに使わせて使い方を知ろうと考えたわけだ」

俺がそう言つてやるとフーケは笑った。

「そのとおりさ。実際使ったのが学院の生徒じゃなくてただの平民だったのには驚いたけどね」

そしてフーケは再度破壊の杖を構える。

「じゃあお礼を言っわ。短い間だけど、楽しかった。さよなら」

フーケの指が『破壊の杖』のトリガーにかかる。

（まずい！原作なら不発で済んだけど今回は確実に殺られる！何か手はないのか？）

その時だった。

突然俺の左手が輝き、刻まれているルーンが変化した。一応『転移』と読める。

（なんだ！？突然ルーンが変化した？なにこれ、『転移』？転移っていうからには移動系のなにかだよな？ってことは……。いける！）

不完全だがルーンの力を理解した俺はフーケの後ろに瞬間移動し、『破壊の杖』の向きをずらした。

「いつの間につ！？」

フーケの指はその衝撃でトリガーを押してしまい、魔法はルイズたちとは全然違う方向に跳んでいった。

「ちっ、ならもう一度！」

フーケはもう一度トリガーを押すが、先ほどのような魔法は飛び出さない。

「残念だったな！それは単発なんだよ。魔法なんか出やしない」

「た、単発？どどういう意味よ！」

フーケは怒鳴った。

「言ってもわからんだろうが、そいつはこっちの世界の魔法の杖なんかじゃない」

「なんですって！」

フーケは『破壊の杖』を放り投げ、杖を握ろうとした。しかし俺はとっさに杖を奪い、投げ捨てた。

「とりあえず一発くらっておけ！」

俺はそういうと、全身に気のようなものをためる。

「いくぜ！鬼神の蹄を身に纏い、悪意の全てを踏み砕く！秘奥義！千鬼鋭蹄弾！！」

数多の魔物が一度に襲い掛かるような奮迅の連続打撃がフーケの体に叩き込まれ、フーケは地面に崩れ落ちた。

「これは俺たちの世界の武器だ。才人！これ『M72ロケットランチャー』でいいんだっけ？」

「俺もよくわからないけど多分あってと思うよ」

そう言つて、俺は『破壊の杖』を拾い上げた。

「シヨウタ？」

ルイズたちは目を丸くして俺を見つめていた。

「ミッションコンプリート。フーケを捕まえて、『破壊の杖』を取り戻したぜ」

そう言つて俺はルイズの方に歩いていく。

さて、あとは帰るだけだな。

10話 決戦と変化(後)(後書き)

ふう……やっと終わった。

ここまでくるのにどれだけの時間を費やしたことが……

これで原作一巻編も残すところエピソードのみ

と、いうわけで次回『結末と解説』

おそらく2、3日中には更新します。

11話 結末と解説（前書き）

前回のあらすじ

さて、無事フーケとのバトルに勝利できた俺こと皐月翔太。
で、このルーンはなんなのさ。

11話 結末と解説

トリステイン魔法学院・夕方・

フーケを捕まえた俺たちは学院に戻り、学院長に報告をしていた。

「さてと、君たちはよくぞフーケを捕まえ、『破壊の杖』を取り返してきた」

オールド・オスマンがそう言うのと、俺と才人を除いた三人が誇らしげに礼をした。

「フーケは、城の衛士に引き渡した。そして『破壊の杖』は、無事に宝物庫に収まった。一件落着じゃ」

オスマン氏は、一人ずつ頭を撫でた。

「君たちの『シュヴァリエ』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじやろう。といっても、ミス・タバサは既に『シユヴァリエ』の爵位を持っているから、精霊勲章の授与を申請しておいた」

三人の顔が、ぱあつと輝いた。感情がわりと出てこないタバサの顔が輝くって……もしかしてこれって奇跡？

「本当ですか？」

キュルケが、驚いた声で言った。

「本当じゃ。いいのじゃ、君たちは、そのぐらいの事をしたんじゃないから」

ルイズは、先ほどから元気がなさそうに立っている才人を見つめていた。

「……オールド・オスマン。サイトたちには、何も無いんですか？」

「残念ながら、彼らは貴族ではない」

オスマン氏がそう言うと、才人と俺は言った。

「何もいらないですよ」

「右に同じ」

オスマン氏はぽんぽんと手を打った。

「さてと、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。このとおり、『破壊の杖』も戻ってきたし、予定どおり執り行っ」

キュルケの顔がぱつと輝いた。

「そうでしたわ！フーケの騒ぎで忘れておりました！」

「今日の舞踏会の主役は君たちじゃ。用意をしてきたまえ。せいぜい、着飾るのじゃぞ」

三人は、礼をするとドアに向かった。

ルイズは才人をちらっと見つめた。そして、立ち止まる。

「先に行つていいよ」

才人が言うと、ルイズは心配そうに見つめていたが、頷いて部屋を出ていった。

「じゃあ俺もいくわ」

俺がそう言うと才人が驚いた様子で言った。

「どうして『破壊の杖』が学院の宝物庫にあつたのか気にならないのか？」

「別に説明しなくても大体想像がつくから聞かなくてもいいや。まあ一応後で教えてくれ」

そして俺は学院長室を後にした。

さて、もうすぐ夕飯時だなーと思い俺は厨房にいく事にした。すると、その途中でふと見覚えのある物を見つけた。

「これって、俺の携帯だよな……。でもなんでこんな所に？」

自分の携帯を見間違える訳がない。そう思ったがとりあえず俺はその携帯を拾うと、プロフィールを確認した。

「皋月翔太、○年×月 日生まれ……。間違いない、俺の携帯だ」

確認し終わった所で突然電話がかかってきた。名前を見ると『小井^{こい}澄伊月^{ずみつき}』と出ている

「小井澄伊月？そんなやつ知り合いにいたかな？」

まあ相手を待たせるのもアレなので、俺は電話に出ることにする。

「はいどーも、皋月ですが」

『ああ、やっと繋がりました』

その声は俺をこの世界に飛ばした神のものだった。

「あんたか……。早速だがなんで俺の携帯がこんな所にあるんだ」

『携帯自体は、貴方を送ったと同時に送ったはずなんですけど、どうやら別々に別れてしまったようですね』

「と言うか何のために携帯を送ったんだ？」

『貴方に掛けた封印を解くときに前もって連絡するためですね』

封印？ああ＋αってことで自分で好きな能力を作れるとかあったな。そんな設定今の今まで忘れてたよ。

「ってことは1つ好きな能力を作ってもいいってことか」

『ええ』

丁度いい、この際オーダーはでっかくいこう。

「じゃあ『自分の知っているアニメ・漫画・ゲーム等の武器・技・アイテム・能力等を自由に造り出す能力』で」

俺がそう言つと神様はしばらくの間返事を返して来なかった。

「おい、生きてるかー」

「生きてますよ。というか何ですかそのチート能力は！貴方には『テイルズ作品の術・技使用可能と武器アイテム等を自由に作り出せる程度の能力』っていう長すぎて文章にしにくい能力があるじゃないですか！」

ああ、そんな長かったっけ。

「もらった時は確かに嬉しかったが今となつてはちよつとバリエーション少なすぎ？みたいな」

『まあバリエーションが少ないのは認めますが…』

「ま、そう言うことなんでヨロシク！」

『はあ……』

神はため息を吐いた。

『いいでしょう。その代わり残りの4個分は無いですよ？』

「まあそこまでアレな能力を付けてもらうんだから別にいいかな」

『では少し待っていて下さい』

俺はそのまま数十秒待った。

『お待たせしました。これで貴方の能力は先ほと言った通りの物になったはずです』

これで俺も晴れてチート主人公が……

「……っと、そうだ。お前に聞きたいことがあったんだ」

『何ですか?』

今までの事でどうしてもわからない事があったので、この機会に聞いておこう。

「まず1つ目。昨日俺たちはデルフ購入イベントに行ったんだ。その武器屋でFFのガンブレードとモンハンの夜刀【月影】っぽい奴があっただが……」

すると神はとてもびっくりしたようで、

『え!?ガンブレードは僕は知りませんがDBってあなたの世界に行ってたんですか?』

「DBってなんだ?ドラゴンボール?」

『違いますよ。DB、デイズアビートと言います。その夜刀【月影】みたいな刀の本来の名前ですよ』

「本来の名前？」

『元々それは僕が暇潰しに作ったデバイスなんですよ』

「デバイスってもしかして……」

『貴方の想像通り『リリカルなのは』的な意味のデバイスです』

もう訳が分かん。

そんな俺などお構い無しに神は話を続ける。

『で、作っていくつかの形態の一つと言う事で夜刀月影の形状にしました。』

「なんで月影の形にしようと思ったんだ？」

『いや、純粹にカッコいいからです』

え………そんだけ？

『そのあと、それ用の管理人格を造った後に無くしたと思ったんですが……貴方のいる世界にいったようですね』

「管理人格ってあのナルガみたいな奴のことか？」

あのカタカナ野郎は管理人格だったのか。

『は？ナルガクルガですか？おかしいですね。そんな風には造っていないのですが……』

神は少し考えているようだった。

『なるほど、恐らく貴方のいる世界にきた際にどこがおかしくなったのかもしれませんが』

「で、直せるの？」

『はい。その方法は後でメールに添付しておきますので見ておいて下さい』

「わかった」

てかメールも届くのねコレ。まあ宛先は神限定だろうが。

「じゃあ二つ目。ルーンの変化についてだ。」

そう言つて俺は左手を見る。召喚されたときは『ガンダールヴ』だったのだが、今は『転移』とかいうなんかよくわからないルーンが刻まれている。

『変化？『ガンダールヴ』ではなかったんですか？』

「最初はガンダールヴだったんだけどフーケとの戦いの時に変わったんだ」

俺はそう言っしかなかった。実際そうなのだから。

『うーん。実はルーンに関しては僕の管轄ではないんです』

初耳だ。てつきりあんたが黒幕かと思っんだが。

『とりあえずルーンの事は専門の人に聞いておくので、後でメールします』

「頼む」

さて、俺が聞きたいことはこれで最後かな……

「で、最後に一つ。小井澄伊月ってだれだよ」

某超能力者の人しか思い浮かばない。

『ああ言ってませんでしたっけ？僕の名前ですよ』

ネタだろ？それ。

「まあいいや、これからなんかあったら連絡するかもしれないのでよろしく」

『僕としてはあまりかけてこない方がいいのですが……まあいいでしょう』

その言葉を最後に通話は切れた。

「全く、謎の存在だなあいつは」

くぎゅうつうつうつ。

腹の音がなって、俺は自分が厨房へ向かっていた事を思い出し、その足を早めた。

トリスティン魔法学院―夜―

食堂の上が大きなホールになっていて、舞踏会はそこで行われていた。

俺が行ってみると才人はバルコニーの枠にもたれ、華やかな会場をぼんやりと見つめていた。

「よう、楽しんでるか？」

俺が近寄ると才人はようやく気付いたようで、

「翔太か……」

なにやら落ち込んでいるらしい。

「なにがあつたんだ？」

俺がそう言つと、才人はオスマン氏との話を聞かせてくれた。

「なるほどねえ。……それよりお前、さっきから飲み過ぎじゃねえのか？」

こつちの世界はどうか知らんが、未成年の飲酒は駄目だと思うんだ。だから俺はこの世界に来てから一度も酒は飲んでなかったりする。

「うるせえ。家に帰れるかも、と思ったのに……、思い過ごしだよ。飲まずにいられるか」

さっきまで才人のそばには綺麗なドレスに身を包んだキュルケがいて、なんやかんやと話しかけてくれたが、パーティーが始まると中に入ってしまったらしい。

それで立てかけてあるデルフリンガーを相手に、憂さを晴らしていたのだった。

ホールの中では、キュルケがたくさん男に囲まれ、笑っている。キュルケは才人に、後でいっしょに踊りましょ、と言っていたらしいが……あの調子では何人待ちになるのかわからないな。

黒いパーティードレスを着たタバサは、一生懸命にテーブルの上の料理と格闘している。そういえばこの前ハシバミ草を食べてみたんだが……正直、あれは無理だ。

まあそれぞれにパーティーを楽しんでるようだった。

と、その時ホールの壮麗な扉が開き、ルイズが姿を表した。

門に控えた呼び出しの衛士が、ルイズの到着を告げた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな~~~~り~~~~」

俺と才人は息を飲んだ。ルイズは長い桃色がかった髪を、バレッタにまとめ、ホワイトのパーティードレスに身を包んでいた。肘までの白い手袋が、ルイズの高貴さをいやになるくらい演出し、胸元の開いたドレスがつくりの小さい顔を、宝石のように輝かせていた。

主役が全員そろったらしく、楽士たちが、小さく、流れるように音楽を奏で始めた。そして音楽のスタートとともに、貴族たちが優雅にダンスを踊り始めた。しかし、ルイズは誰の誘いをも断ると、バルコニーの俺たちに気づき、近寄ってきた。

ルイズは、俺たちの前に立つと、腰に手をやって、首をかしげた。

「楽しんでるみたいね」

「別に……」

「さほど楽しくはないかな、とりあえず肉うめえ」

と、才人は目を逸らして、俺はどこから持ってきた肉を食べつつルイズに答える。

デルフリンガーがルイズに気づいて、「おお、馬子にも衣装じゃねえか」と言った。

「うるさいわね」

ルイズは剣を睨んだ。

「で、お前は踊らないのか？」

俺はそう言っただけ。

「相手がいないのよ」

ルイズは手を広げた。

「いっぱい、誘われてたじゃねえかよ」

才人は言った。ルイズは、答えずに、ずっと手を差し伸べた。

「踊ってあげても、よくってよ」

目を逸らし、ルイズはちょっと照れたように言った。

「踊ってください、じゃねえのか」

才人も目を逸らした。

しばらくの沈黙が流れた。

（なんなんだこの空気は）

はあ、とルイズがため息をついて、先に折れた。

「今日だけだからね」

ルイズはドレスの裾を恭しく両手で持ち上げると、膝を曲げて俺たちに一礼した。

「どちらか、わたくしと一曲踊ってくださいませんか。ジエントルマン方」

そう言つて顔を赤らめるルイズは可愛くて、綺麗で、清楚だった。

「才人、行つてこい」

俺は才人の背中を押す。才人はふらふらとルイズの手を取った。

二人は並んで、ホールへと向かった。

才人とルイズが踊っているのをバルコニーから俺と一緒に眺めていたデルフリンガーが、こそつと呟いた。

『おでれーた！』

二つの月がホールに月明かりを送り、ロウソクと絡んで幻想的な雰囲気を作り上げている。

『相棒！てーしたもんだ！』

踊る才人とその主人を見つめながら、デルフリンガーは、おでれーた！と繰り返した。

『主人のダンスの相手をつとめる使い魔なんて、始めて見たぜ！』

「そうだな」

とデルフに言ってやる。

『おっと、そういえば兄さんも『使い手』なんだよな？』

「いや、もう違うみたいだ」

俺は左手でデルフを掴む。

『ん？いや、そんなことはねーぜ。しっかり『使い手』のルーンが……ってあれ？兄さん、どういう事だ？『使い手』のルーンとは別にもう一つルーンが刻まれてやがる』

え！？『転移』のルーンで『ガンダールヴ』って消えたんじゃないか
ったのか？

どういう事だよ神様アアアアア！！

そんな心の叫びを聞くものではなく、ただ二つの月だけが俺を見ていた。

11話 結末と解説（後書き）

前回のあとがきで

・おそらく2、3日中には更新します・

と書きましたが……

約1ヶ月近く放置してました（笑）

と、いうのも月影さんの正体とか個人的にすごくやっちゃった感がありまして、どうしようかと悶えていたって話なんですけどね。

でも大丈夫です。なんだかんだで今13話まではできているので、本気を出せば明日にでも更新できるはず……です。

と、いうわけで次回から原作2巻編突入！『アホの子、襲来』

あまり期待せずにお待ちください。

あ、でも次はキャラクター紹介とかになるかもしれません。

ご意見ご感想お待ちしております。

キャラクター設定（一章終了時点）（前書き）

さて、今回は約束通りキャラクター紹介です。

キャラクター設定（一章終了時点）

皇月翔太

主人公

年齢 18

外見 『ソードアート・オンライン』のキリトが少し成長した感じ。

CV 未定

・神様の切った爪が刺さつての大量出血死という訳のわからない理由で死んでしまった哀れな人。

・神様のお詫びという事で『テイルズ作品の術・技使用可能と武器アイテム等を自由に作り出せる程度の能力』という書くのがとてもめんどくさい能力をもらってゼロ魔の世界へと送られる。主人はルイズ。マスター

・ルイズとの契約時に刻まれたルーンは『ガンダールヴ』だったが、フーケ戦（10話）で『転移』のルーンに変化した。しかしデルフリンガーによるとまだ『ガンダールヴ』は残っているらしい。

能力

・『テイルズ作品の術・技使用可能と武器アイテム等を自由に作り出せる程度の能力』（1話～11話）

文字通り。しかし、11話での神との会話により『自分の知っているアニメ・漫画・ゲーム等の武器・技・アイテム・能力等を自由に造り出す能力』の能力にレベルアップしたため、この能力は無くなった。

・『自分の知っているアニメ・漫画・ゲーム等の武器・技・アイテム・能力等を自由に造り出す能力』（11話）

こちらでも文字通り。11話での神との会話により『テイルズ作品の術・技使用可能と武器アイテム等を自由に作り出せる程度の能力』が進化したことにより習得。この能力を手に入れたことで、名実共にチート主人公になった。名前の通り自分の知っている作品だけのため、多少偏っている。

ルーン

・『ガンダールヴ』

原作通りの『神の盾』。身体能力増加等、いつも通りの性能を持つ。

10話で消えたかと思いきや、エピソードでのデルフのセリフにより残っている事が判明した。かなり謎な立場。

・『転移』

10話のフーケ戦において突如出現したルーン。実は2話でもちらつと出ていた。能力的には『とある魔術の禁書目録』等に出てくる『白井黒子』の『空間移動^{レポート}』と同じ能力。なぜ出現したのかは不明。

とりあえず神からの連絡を待つしかない。

武器

・夜刀【月影】欲望の鼓動（ディザイアビート）

デルフ購入イベント（7話）で翔太が見つけた。実はこの剣、神が造ったデバイス（詳しくは小井澄伊月の欄を参照）で本当の名前はと言う。しかし少々おかしくなっているらしく、元に戻したらどうなるのかという点に期待。

一章終了時点で使った技（初登場した話）

・魔人剣（2話）

おそらくテイルズで一番有名な技。エターニアでのクレス戦がトラウマになった人も多いはず。

・スプレッド《小》（4）

圧縮された水流を上空に向けて打ち出す術。詠唱はシンフォニアから。この呪文を使った相手（？）が火災だったため、威力を落として使用した。

・インディグネーション《非殺傷》（5）

なんだかんだで有名な術。最近では秘奥義として扱われることも多い。さすがに殺したくはなかったので非殺傷で放った。

・キュア（5、6）

単体回復の最上位。死んでなければ完全に治せる。

・ウィンドカッター《少》（8）

風の刃で切り刻んで攻撃する術。縄を切る程度の目的だったため、威力を落として使用した。

・無影衝（10）

剣を薙ぎ払って衝撃波を起こし、前方を攻撃する特技。

・ファイアフルストーム（10）

強烈な竜巻を発生させて攻撃する術。詠唱はD2のマグナ様から。

・千鬼鋭蹄弾（10）

間断なき拳と蹴りによる連続打撃を加える秘奥義。個人的に格闘系の秘奥義の中で1番好きです。

小井澄伊月

年齢 不明

外見 名前の通り『涼宮ハルヒの憂鬱』に登場する『古泉一樹』が

モデル

CV 小野大輔

翔太をゼロ魔の世界に送った張本人で神。神としてのレベルは上の下。昔暇潰しに『リリカルなのは』的なデバイス（ディザイアビート（以下DB））を造ったが管理人格と一つの形態（モデルは夜刀【月影】）を搭載した時点でどこかになくしたらしかった。さて、それから長い年月がたってそんなこと忘れて生きていたのだが、翔太との会話（11話）によってその存在を思い出した。現在はDBのバグの修復方法を検索中との事。

キャラクター設定（一章終了時点）（後書き）

どうだったでしょうか？

自分としてはがんばったほうだと思いますが。

さて、今度こそ次回から原作2巻編突入！『アホの子、襲来』
お楽しみにっ！

コメント等お待ちしております。

12話 アホの子、襲来（前書き）

と、いうわけで今回からタイトルを『ゼロの使い魔 - 転移する盾 -』に変更しました！

まあやることは変わってないので、過度な期待はしないでね？

12話 アホの子、襲来

トリスティン魔法学院厨房―午前―

土くれのフーケとの戦いから数日たったある日のこと。俺はいつも通りに厨房の手伝いをしていた。え、ルイズ？あいつは才人に任せることにした。でも心配なんだよなあ！。昨日の夜だってこっそりルイズのベッドに忍び込んだらしく、朝会ったらなんか犬状態だった。

は？俺はどこで寝てるって？

まず最初に言っておく。あの部屋にいと寿命が縮まりそうで怖い。そう思った俺は神からレベルアップさせてもらった能力を使ってFシリーズのテント（使い捨て。朝になったら砂になったのはびびくりした）を造り出して外で寝てます。

と、そんなわけで少し暇だなあ……などとお茶を飲みながら休憩していたんだが……。

「皆さん大変ですっ！」

シエスタが慌てて飛び込んでいた。

「どうしたんだシエスタ。そんなに慌てて」

そう俺が問いかけると、

「ええとですね。なんと！アンリエッタ姫殿下が、本日この魔法学院に来るらしいんです！」

シエスタの知らせを聞いた厨房の皆は、大喜びしていたのだが、当の俺は……。

（ついにこのイベントがきてしまったか……。アホリエッタ！）

何を隠そうこの俺、皐月翔太はアンチアンリエッタ派の人間である。

あの色ボケ脳内桃色姫が原作で、いやこの世界で何をやらかすか思いついただけでもやる気を失う。

（同じCVならまだ某腹ペコ王のほうが断然いい！！）

と、まあやる気を失った俺はふらふらと厨房を後にしようとする。

「シヨウタさん！どこに行くんですか？」

（すまん、シエスタ。でも俺は少しでも平和に過ごしたいんだっ！）

そう心の中でシエスタに謝りつつ、俺は厨房から遠ざかり、いい感じの場所で昼寝を始めた。

トリステイン魔法学院某所―夜―

さて、寝てる間ってのは以外と時間が早く進むってもので、起きた時には辺りは真っ暗だった。

「寝過ぎたな……」

とりあえず厨房の皆には後で謝罪しておこうと思いつつ足が自然とルイズのへやに進む。なぜだ。

「ん？」

ルイズの部屋の前に誰かがいる。一体誰だ？

「なんだ、ギーシュか」

そう、そこにいたのは以前決闘したギーシュ・ド・グラモンだった。相変わらず薔薇の造花を手を取っている。

「ひっ！………なんだ君か」

ギーシュは一瞬とても驚いた様子だったが、相手が俺だと解ると、すぐに態度を改めた。

「で、ギーシュよ。お前こんな所で何してるんだ？」

「しっ、静かにしてくれ！今ルイズの部屋にアンリエッタ姫殿下が来てるんだ」

「……そうかい、じゃあ静かにしてますよ」

しかし俺が静かにするはずもなく、ギーシュの邪魔をしたりして遊んでいたのだが……。

「姫殿下になにしてんのよッ！　いいいい、犬ーーーーッ！」

突然ルイズの怒鳴り声が聞こえてきた。

「なんだ？」

俺の邪魔のせいで肝心のシーンを見れなかったギーシュが、俺に聞いた。

「なんか才人が姫サマにキスしたらしい。唇に」

俺の言葉を聞いたギーシュは、ドアを勢いよく開けて、

「きさまーッ！　姫殿下にーッ！　何をしてるかーッ！」

「なんだお前」

見ると才人は床に転がって、ルイズに顔を踏まれた状態だった。どうしてそうなった。

で、ギーシュはそんな才人の質問には答えず、夢中になってまくし立てる。

「薔薇のように見目麗しい姫様のあとをつけてみればこんな所へ……それでドアの鍵穴からまるで盗賊のようにそこの使い魔君と一緒に様子をうかがえば……、平民のバカがキス……」

ギーシュは薔薇の造花を振り回して叫んだ。

「決闘だ！バカチンがあああああ！」

そんなギーシュの顔に俺の蹴りと、いつの間にか立ち上がっていた才人の拳が叩き込まれた。

「あがッ！」

「決闘だあ？ボケが！テメエが俺の腕折ったの忘れてねえぞ！こちららあ！」

「一緒に様子をうかがえばだあ？ふざけるなアホ！最初の辺りはお前一人だったろうが！」

「でも見てたんでしょ？」

ルイズの突っ込みが入る。

「いや、まあそうだけどさ……別にいいだろ。使い魔だもの」

「だったら普通に入ってきなさいよ」

「ですよー」

「で、どうします？こいつ、お姫さまの話を立ち聞きしやがりましたけど。とりあえず縛り首にしますか？」

才人がギーシュに馬乗りになってその首を締めあげながら言った。

「そうね……、今の話を聞かれたのはまずいわね……」

ギーシュは才人の隙について、立ち上がった。

「姫殿下！その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せつけますよう」

「グラモン？あの、グラモン元帥の？」

アンリエッタが、きょとんとした顔でギーシュを見つめた。

「息子でございます。姫殿下」

ギーシュは立ち上がると恭しく一礼した。

「あなたも、わたくしの力になってくれるというの？」

「任務の一員に加えて下さるなら、これはもう、望外の幸せにございます」

熱っぽいギーシュの口調に、アンリエッタは微笑んだ。

「ありがとう。お父様も立派で勇敢な貴族ですが、あなたもその血を継いでいるようね。では、お願いしますわ。この不幸な姫をお助け下さい、ギーシュさん」

「姫殿下がぼくの名前を呼んで下さった！姫殿下が！トリスティンの可憐な花、薔薇の微笑みの君がこのぼくに微笑んでくださった！」

ギーシュは感動のあまり、後ろにのけぞって失神した。

「大丈夫かこいつ？」

才人がギーシュをつつく。

「で？任務がどうのこうの言っているが、一体なんの事だ」

無論大体の事は解っているが、とりあえずルイズに聞いておこう。

「え、あんた聞いてたんじゃ無かったの？」

「だから俺は途中からしか聞いてないって」

「ルイズ、その……彼は何者なんですか？」

アンリエッタは、ルイズに聞いた。

「紹介が忘れていました。先ほども言いましたがわたしのもう一人の使い魔ですわ」

と、ルイズが俺の事を紹介する。

「そういえばあなたは人を二人召喚していましたわね。どうも、いつもルイズを守ってくれてありがとう」

「いや、そこまでやってないけどな。とりあえず自己紹介だ。皋月翔太、皋月が家名で翔太が名前。東方のメイジだ（大嘘）。よろしく」

とりあえず自己紹介しておく、俺はルイズに向き直る。

「で、だ。任務ってなんだよ」

「ならもう一度説明いたしますわ」

と、アンリエッタによるここまでの説明が始まった。

「なるほどね」

端的にいうとアルビオンにいつて手紙を回収してこい！みたいな内容だった。

「で、いつ行くの？」

とりあえずルイズに聞いておく。

「明日の朝よ」

そんなルイズの言葉にやっぱりか……、としか思えない俺だった。

「一応聞いておくが、俺も行くの？」

「当たり前じゃない。あんたはわたしの使い魔でしょ？」

「はあ……了解」

やれやれ、俺の平和は終わったようだ。

12話 アホの子、襲来（後書き）

と、いうわけで始めました原作二巻編！

少しずつですがオリジナル要素を入れつつやっていこうと思っています。

では次回！『ワルドはいいが……あんた誰！？』

期待しすぎずに待っててください。

感想等ありましたらどんどんお願いします。きっとそれが原動力になるはずなので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9558o/>

ゼロの使い魔 - 転移する盾 -

2011年10月6日11時33分発行